魔法少女リリカルなのは～天空の瞳～

ユゥイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは～天空の瞳～

【Ｎコード】
Ｎ８１１３Ｒ

【作者名】
ユゥイ

【あらすじ】
金髪の魔導士、フェイトは思った。
…なんて悲しそうな目をするんだろうと。

茶髪の少女、はやては言う
「何でそんな目をするん？悲しそうで、苦しそうで…何かを諦めた…そんな目をしとるよ」

そして少女は言う
「生きることは苦しみでしかない」
白い魔導士の少女、なのはは叫ぶ「苦しみでしかないなんて…そんなの嘘だよ！」

「私じゃ友達に…支えになれないのかな」
「あの子と話しとるとな、思うんよ…懐かしいなぁ…て。なんでやろ？」
「私、思い出したいの。夢に出てくるあの子の名前を」
これは悲しみと苦しみにより心を閉ざしてしまった少女と心優しい少女達の物語。
魔法少女リリカルなのは～天空の瞳～始まります。

※１２／３０
オリキャラとデバイスの設定を整理しました。
設定を一部変更しました！挿し絵をほとんど描き直しました。オリキャラ＆デバイス設定に載せているので良かったら見て下さい！

オリキャラ&デバイス設定（１２／３０更新）

＞ｉ３７９８２―２７８８＜
名前：レイヴン途中からレイ・ハラオウン（本名不明）
魔力：ＡＡだけど…？
魔力光：銀色（少し赤みを帯びているらしい）
術式：古代ベルカ式
デバイス：アームドデバイス「アルジェントウィング」
　　？？？？？
能力：魔力変換資質「炎熱」
　　剣術と格闘技
　　？？？？？
戦闘スタイル：速度重視の近距離戦闘型
参照：第９４管理外世界『イーリス』の研究所でモルモットにされていた。
年齢：１０歳
性別：女
声：女にしては低め
容姿：上の挿し絵をご覧下さい。（服装はアースラに保護されたときに着ていたものです。
ちなみに生地の薄い服だったので冬の日本では風邪を引くし、目立つためリンディに着替えさせられた。）
口調：荒っぽい男のような口調（だけど本当はそこまで口調は悪くなかったらしい。
）

アルジェントウィング
レイのデバイスその１。アームドデバイス。
待機形態は黒い十字の入った銀色の指輪。（上の挿し絵のレイの指にはまっているのがそうです。）付属のチェーンで首からさげるか右手の中指に付けている（その時チェーンは手首に巻いている。）
３つあるすべてのフォルムにカードリッジシステムが２つ付いている。

＞ｉ３７９８１―２７８８＜
チェーンクリンケフォルム
これは二本の大剣（魔力刃）を魔力で作った鎖で繋いだ形態で、鎖の長さをレイが自由に調節して戦います。
鎖を最も短くすると一本に繋がります。この状態で長さが２ｍ以上に成ります。
（上の挿し絵をご覧下さい。）

ハンドシュフォルム
これはナックル型で短い魔力刃を作ることも出来る。
肉弾戦用のフォルム。（上の挿し絵をご覧下さい。）

シュトゥルムフォルム
（フルドライブ）
限界値ギリギリまで魔力を引っ張り出すレイの切り札。
セカンドコアもフルに活用するため、髪が足にかかるほど伸び、髪と目が銀色になる。
魔力刃をくの字形に展開する変わったフォルム。連結するとひし形のような形になる。（上の挿し絵をご覧ください。）

騎士甲冑はズボンです。（上の挿し絵をご覧下さい。）

＞ｉ３７９８０―２７８８＜
＞ｉ２７１０４―２７８８＜
名前：ミコト
魔力光：銀色
術式：古代ベルカ式
参照：第９４管理外世界『イーリス』に生息する毛の色が灰色と白のしましまの虎が素体（上の挿し絵をご覧ください。）
性別：男（雄）
容姿：１１、１２才位の少年の姿で居ることが多かった。目の色は茶色で髪の色は灰色、耳や尻尾が白。（上の挿し絵をご覧ください。）
が、現在は子猫フォームで居ることが多い。

＞ｉ２１３２７―２７８８＜
名前：アイザー
魔力光：青色
参照：ユニゾンデバイスの少女。
元々はシアン（後述）の娘のデバイス。
レイとはあまり相性が良くない。
シアンからレイの能力暴走を止めるための「鎮静プログラム」を預かっている。しかし不完全なプログラムらしい。
容姿：上の挿し絵をご覧下さい。

シアン・キャンベル

第９４管理外世界「イーリス」に在った研究所のデバイスマスター兼研究者。一人娘がいた。
研究所の研究者の中で唯一、非人道的な実験や研究に否定的だった。
レイのデバイス「アルト」やアイザーをつくった。
第１話で研究所と一緒に爆発し死亡した。
因みに研究所を爆破したのは研究者達の遺体を処理するためだと思われる。

1話　―プロローグ<1>―（前書き）

どうも。今回が初めての小説です。ユゥイと申します。
初めてですので駄文が多かったり、原作知識が少ないため原作キャラの話し方が違う等、色々あると思いますが、読んでいただけると嬉しいです。ではよろしくお願いします。

1話　―プロローグ<;1>;―

とある無人世界の研究所

そこは血の海になっていた。
あちこちで研究者たちが引き裂かれ、血溜まりができていた。
その研究所の一番奥の部屋に三人、まだ人がいた。
ひとりは両手を真っ赤に染め、左目に眼帯をした少女、もうひとりは白衣を着た女性、そしてユニゾンデバイスの少女。
女性「彼らを殺してしまったのね…。」
悲しそうに少女に問い掛ける。
少女「私は友達を…あなたの娘を死に追いやった奴らを許せなかったんです…シアンさん。」
シアン「…人を殺すというのがどういうことか解ってる？」
少女「はい…私の命で償えるものでは無いでしょう。」
　シアン「ならどうする？」
少女「どんな地獄を見ようと生きようと思っています…あの子が私に最期に願ったことですから。」
シアン「そう…」
すると今まで黙っていたユニゾンデバイスの少女が、
？？？「マスターが言ってたぜ！”お母さん今までありがとう…私、幸せだったよ”ってな。」
シアン「そう…あの子が…ありがとうアイザー。」
アイザー「マスターの願ったことだからな。伝えるのは当然だっ！」
シアン「ありがとう…」
シアンは泣いていた。

ひとしきり泣くと少女に聞いた。

シアン「そう言えばミコトは？」
ミコトとは少女の守護獣である。
少女「あの子と一緒に居てくれてる。一人にしたくなかったから…」
シアン「…ミコトを呼んでくれる？娘に会いたいの。それと着替えてらっしゃい、いつまでも血だらけは嫌でしょう？」
少女「…わかった。いってくる。」
少女がいった後、
シアン「アイザー、今からあるプログラムを預けるわ。そして、あの子を次のマスターにしなさい。」
アイザー「だけどアタシはあいつとユニゾン出来ないよ！」
シアン「大丈夫。そのためのプログラムだから。でもまだ完全なプログラムじゃ無いだから使うときは慎重にね？」
アイザー「どんなプログラムなんだ？」
シアン「今送るから後で確認して。」
アイザー「わかった。」

暫くすると少女が帰ってきた。シアンの娘の遺体を抱いたミコトを連れて。
少女「…連れてきたよ。」
シアン「ありがとう。」
ミコトから娘を受け取ると娘に謝罪と感謝をした。
シアン「ごめんなさい、守ってあげられなくて。そしてありがとう…生まれて来てくれて…」
少女「…もういいの？」
シアン「ええ…。」
ミコト「これからどうする？」
シアン「とりあえず娘の墓を作ってあげて欲しいの。」

少女「わかった。」
シアン「後、アルト（少女のデバイス）を出して。この研究所で行われていたことに関するデータを送るわ。」
少女「何でそんな物を？」
シアン「…きっといつか必要になるわ。」
少女「…わかった。」

シアン「送り終わったわ。じゃあ外に転送するからお墓、作ってあげてね。」
少女「シアンさんは？」
シアン「……私にはまだすることがあるの。……後ですぐ行くわ。」
少女「わかった。」

シアン「準備はいい？」
「「「はい（ああ）」」」
シアン「いってらっしゃい」

そして研究所にひとり残ったシアンは
「ごめんなさい…」
一言謝りそして、

…研究所もろとも爆発した。
そしてそこには大きなクレーターができ、何も残らなかった。

外でそれを見ていた少女達は呆然としていた。
アイザー「…嘘だろ…」
少女・ミコト「「……」」

とりあえず墓を作り少女は言った
少女「私は大切な人を一人も守りきれなかった…そんな自分が嫌だよ…」
アイザー・ミコト「「…」」

少女「…私は…いや、オレは今までの自分を捨てる、名前も何もかも。」
アイザー・ミコト「「（は？）え？」」
少女「オレはもう大切な人をこれ以上作らない…だって」

――傷つける事しか出来ないんだから――

こうして少女は心を閉ざしてしまった。

1話　―プロローグ<1>―（後書き）

短くなってしまいすみません。次回はもっと長くなる予定です。
感想や意見をいただけると嬉しいです。
また読んでいただけると嬉しいです。

2話　―プロローグ<2>―

その日オレは夢を見た。

…大昔のどっかの城みたいだ。

???「殿下！」

男の声がする…

???「ごめんなさい。我が騎士レイヴン。病に勝てませんでした。」

目の前の女性は今にも死んでしまいそうだ。

レイヴン「殿下…」

???「ねえ、レイヴン。」

レイヴン「…何でしょうか」

???「私が死んでも国を守ってくれる？」

レイヴン「もちろんです。」

???「ありがとう…それともう一つお願いがあるの。聞いてくれる？」

レイヴン「はい、何なりと。」

???「ありがとう…私の魔導書についてなんだけれど、これから先あの子が欲のある人間に改悪されないか心配なの。だからあなたに修正プログラムを預けておきたい。」

レイヴン「…解りかりました。お任せ下さい。」

???「ありがとう…これで心残りなく逝けるわ…」

レイヴン「…！殿下！」

???「…」

これは…きっと「アレ」の記憶だろう。

ガバッ
少女「…」
ミコト「あ、おはよう姉さん。……どうしたの？」
此処はあの研究所が在った場所の近くの湖のほとりである。
少女「…何でもない。これからやらなきゃならないことができただけだ。」
ミコト「それは大急ぎで？」
少女「いや、いつかやらなきゃいけないってだけだ。」
ミコト「そう。じゃ、アイザー起こしてくれる？ご飯にしよっか。」
少女「解った。」

2話　―プロローグ<2>―（後書き）

すみません。長く書くと書いておきながら短くなってしまい、ごめんなさい。
次回はプロローグは終わり、本編へ入るつもりです。
意見や感想をいただけると嬉しいです。

3話　ー管理局との接触<1>《A's編》ー

～アースラ～

クロノ「やっとなのはに会えるな、フェイト。」
フェイト「クロノやアースラのみんなのお陰だよ、ありがとう。」
クロノ「そう言えば、今日も戦闘訓練するのか？」
フェイト「うん、お願い。」

船員「管理局本局とのドッキング準備、全て完了です。」
リンディ「裁判も終わったし、順調ね♪」
ドボンッドボンッ
エイミィ「はい。（相変わらず、お茶に砂糖入れすぎだよ…艦長。）」
リンディ「本局にドッキングして、アースラも私達もやっと一休みね～。」
エイミィ「ですね。」

船員「！！艦長！救難信号です！」
リンディ「！どこからかしら？」
船員「第９４管理外世界『イーリス』です！」
リンディ「…あそこには人は居ないはずだけど…。…！！　エイミィ！直ぐクロノを呼んで！」
エイミィ「解りました！」

クロノ「どうしましたか艦長？」
フェイト「どうしたんですかリンディ提督。」
リンディ「フェイトさんも一緒だったのね。じゃあ、フェイトさんにも頼めるかしら？」
フェイト「？何ですか？」
リンディ「第９４管理外世界『イーリス』から救難信号が出てるのよ。」
クロノ「しかし、あそこは無人世界では？」
リンディ「そうなのよ…それと、これを見てちょうだい。」

フェイト「…何、これ」
其処に映し出されたのはあのクレーターだった。
クロノ「…自然に出来たとは考えにくいですね。」
リンディ「ええ、詳しくは降りてみないと解らないんだけど、警戒して動こうと思うの。フェイトさんは嘱託だし、無理にはお願いしないけど…行って貰えないかしら？」
クロノ・フェイト「「はい」」
アルフ「フェイトが行くならアタシもいくよ！」
リンディ「お願いするわ。気をつけてね。」
クロノ・フェイト・アルフ「「「はい（ああ）」」」

～同じ頃・イーリス～

少女「…どうしようか。」
アイザー「って、まだ決めてなかったのかよ！もう三日じっとして

るだろ！」
ミコト「まあまあ、転移しようにもこの辺りにある世界の知識も無くて一文無しのボクらは動こうにも動けないんだよ？」
アイザー「解ってるけどよっ動かないと始まらないじゃねぇか！」
少女「……そうなんだよな…」
アイザー「あーもうイライラするなー！自分を捨てるって言ってから性格代わり過ぎなんだよー調子狂うな！！」
ミコト「まあまあ、落ち着いて…」

…ずっとこんな調子である。

〈少女ｓｉｄｅ〉

アイザー・ミコト「「！！？」」
少女「…誰か来たな。」
ミコト「どうする？」
アイザー「殺すか？」
少女「いや…まだ敵と決まった訳じゃないし、様子見だ。…もう殺しはしたくないしな。」
アイザー「解った。」
ミコト「武装はどうする？」
少女「取りあえず、準備だけはしといてくれ。」
ミコト「解った。」

〈少女ｓｉｄｅｏｕｔ〉

〈フェイトｓｉｄｅ〉

フェイト「…何か解った？クロノ。」
今あのクレーターの前にいる。
クロノ「…何か爆発のような物が起こったことぐらいしか解らないな。」
アルフ「…じゃあ救難信号出した奴も一緒に吹っ飛んじまったんじゃないかい？」
フェイト「どうだろう…。……！！」
アルフ「どうしたんだい？フェイト？」
フェイト「…誰か来る。」
クロノ・アルフ「「！！」」

やって来たのは同い年くらいに見える眼帯をした女の子と使い魔の少年と…小人？だった。…私はその女の子を見たとき思ったんだ。どうして『こんな悲しそうな…辛そうな目をするんだろう』って。

４話　ー管理局との接触<2>ー（前書き）

どうも。ユゥイです。
今回から「」は会話、《》は念話、【】は心の声とカッコ分けをする事にしました。少しでも読みやすくなっていると嬉しいです。
では宜しくお願いします。

4話　ー管理局との接触<2>ー

〈少女ｓｉｄｅ〉

オレ達はやってきた『誰か』の様子見に来たんだが…

少女《子供だな…》
アイザー《どうするよ？》
ミコト《姉さんと年の近そうな子達だし、話してみたらどうかな？》
アイザー《そんなとこで判断すんなよ。いくら子供でも武装してんだぞ？》
少女《まあ、命の取り合いがしたい訳じゃなさそうだし、隠れてても仕方ない、話してみるか。》
ミコト《うん！》
少女《…アイザー？》
アイザー《…ちっ解ったよ！》
少女《…じゃ、行くぞ。》

〈少女ｓｉｄｅｏｕｔ〉

少女「お前達何者だ？」
クロノ「時空管理局執務官クロノ・ハラオウン」
フェイト「同じく時空管理局嘱託魔導師フェイト・テスタロッサ」
アルフ「フェイトの使い魔、アルフ」
クロノ「そちらも名前を教えてくれないか？」
アイザー「この子のユニゾンデバイス、アイザーだ。」

ミコト「ボクは姉さんの守護獣、ミコト。」
少女「…お前らに名乗る名は無い。」
アルフ「なっ！！？」
フェイト「アルフ落ち着いて。」
クロノ「…それは我々に対する挑発と取っていいのか？」
少女「…なあ…ミコト。」
アイザー・ミコト【【…まさか…】】
ミコト「何？姉さん。」
少女「…オレ、いつ挑発した？」
クロノ・アルフ・フェイト「「「は（え）？」」」
ミコト「…やっぱり…姉さん、」
少女「何？」
ミコト「あんな言い方されたら挑発されたと誰でも思うよ。」
少女「そうなのか。そりゃ悪かった、言い直そう。」
クロノ・アルフ・フェイト【【【この子天然だ（ねぇ）（かな）…】】】
少女「名乗る名がないんだ。」
アルフ「…本当に名前が無いのかい？」
少女「ああ、名前なんて捨てたからな。」
クロノ・アルフ・フェイト「「「……。」」」
ミコト「でも姉さん、名前がないとこれから不便じゃない？」
少女「そうだな…じゃあ、レイヴンとでも名乗っておくか。呼びにくかったら好きに呼んでくれ。」
アイザー「…いい加減だな…。」

レイヴン「それで聞きたいんだが良いか？」
クロノ「ああ。」
レイヴン「どうして管理局はここに人がいると気付いたんだ？」

クロノ「救難信号が出ていたんだが…君達じゃないのか？」
レイヴン「ああ…おそらく信号を出したのは「シアンさんだね。」
レイヴン「…人が喋ってる途中に喋るんじゃないよ‥。」
ミコト「う‥ごめん。」
アイザー「まあ、間違いないだろうな。」
レイヴン「ああ。」
アルフ「‥で、そのシアンって人は何処にいるんだい？」
レイヴン「…其処に在った研究所と一緒に吹っ飛んだよ。」
アルフ「…ごめ「謝らなくても大丈夫だ。」
ミコト「‥姉さん‥」
レイヴン「そんな泣きそうな顔をするな。」
ミコト「うん…。」
フェイト「じゃああなた達以外に人は？」
レイヴン「居ない。」
クロノ「…君達に戦闘の意志はないね。」
レイヴン「ああ。」
ミコト「うん。」
アイザー「当たりめーだっ！」
クロノ「それじゃあ君達は我々が保護する。詳しい話はアースラでしよう。いいかな？」
ミコト「アースラ？」
クロノ「ああ、『L級巡航艦船アースラ』。僕らが乗ってきた船のことだ。」
ミコト「へー。」
クロノ「…と言うことで、レイヴン・ミコト・アイザーの三名を連れて帰還します。」
船員「了解。」

４話　ー管理局との接触<2>ー（後書き）

誤字脱字が多く申し訳ありません。見つけたら教えて下さると助かります。
意見や感想があったら嬉しいです。
では読んで下さってありがとうございました。
気に入っていただき、次話も読んでいただけると嬉しいです。

5話　ーアースラへー

～アースラ～

リンディ「思ったよりすんなりついて来てくれそうね。」
エイミィ「そうですね。」
クロノ「…と言うことでレイヴン・ミコト・アイザーの三人を連れて帰還します。」
船員「了解。」

リンディ《クロノ、部屋で待ってるわ。》
クロノ《解りました。直ぐお連れします。》
ミコト「わ～、おっきいよ姉さん。」
レイヴン「見れば解る。」
アイザー「もうちょっと言い方があるだろ。…まあ、確かにでけーな。」
クロノ「艦長が部屋で待っているんだが…。」
レイヴン「それは済まない。」
クロノ「では案内する。こちらへ。」

ミコト《ねえ、姉さん。》
レイヴン《…何だ？》
ミコト《何でレイヴンって名乗ったの？》
レイヴン《…夢にそんな名前の男が居たからだ。特に意味は無い。》
ミコト《ホントに？…レイヴンって大鴉（渡りガラス）の事だよね？姉さんの事だから何か考えて付けたんでしょ？》
レイヴン《…知ってるか？ベルカではレイヴン（大鴉）は　あの世

の使いといわれているんだよ。…オレにぴったりじゃねぇか。》
ミコト《…姉さん…》
コンコンッ
クロノ「失礼します。」
リンディ「お疲れ様、クロノ・フェイトさん・アルフさん。」
カポンッ
レイヴン【…鹿威し…何で？】
アイザー・ミコト【【何だ（何）？この部屋…】】
一言で言うと、外国人って日本の文化解ってないな～て感じの和の物が不自然に飾られた部屋だった。
リンディ「いらっしゃい♪私が艦長のリンディ・ハラオウンです。あなた達はミコトさんとアイザーさんとレイヴンさん…で良かったかしら？」
レイヴン「ああ。」
アイザー「そうだ。」
ミコト「合ってるよ！」
リンディ「それでは色々と話を聞きたいんだけど…レイヴンさん？」
レイヴン「呼びにくかったら好きに呼んで貰って構いませんけど？」
リンディ「そう？それじゃあレイさんって呼ぶわね。」
レイヴン「ああ。好きにしてくれ。」
アイザー「レイか…良いじゃねぇか。レイヴンは呼びにくいし、そっちを名乗ったらどうだ？」
ミコト「うん！そうしよっ姉さん。」
レイヴン「ミコトの中では決定事項か？」
ミコト「うん♪」【あんな悲しい理由の名前、名乗って欲しくないし。】
レイヴン「…はあ、好きにしろ。」
ミコト【やった♪】
クロノ「話が反れているんだが…」
レイ「すまない。」

ミコト「ごめんなさい。」
リンディ「まず、何故あなた達が彼処に居たのか聞いてもいいかしら？」
レイ「ああ。」
アイザー「…」
レイ「…私はあのクレーターのある場所に建っていた研究所でモルモットにされていた。」
リンディ「…何があったの？」
アイザー「そんなの話したくねーに決まってんだろ！」
リンディ「…そうよね、ごめんなさい。心の整理がついたら教えてくれるかしら？」
レイ「…考えておく。」
アイザー《レイ！いいのかよ！》
レイ《…いつかは話さなければならないようだし、待ってくれると言うんだ。考えてやる位やっても良いんじゃないか？》
アイザー【考えるだけか！】《…でもよ…》
リンディ「次はあのクレーターの事なんだけど、」
レイ「すまない、話したくない。」
クロノ「なっ！」
アイザー「信頼出きるか解らん組織の連中に話すかよ！」
レイ《…アイザー、管理局を嫌うのは解るがもう十分復讐はしたんだ。そう殺気立つな。…憎しみで身を滅ぼすぞ？》
アイザー《…解ってる》【レイに言われるなんてな…アタシがしっかりしなきゃなんねーのに】
リンディ「…話して欲しかったら、あなた達の信頼を得るしかないのね。」
レイ「ああ。」
クロノ「君達さっきからちょと無礼じゃないか？」
リンディ「いいのよクロノ。」
ミコト《姉さん、管理局員がボク達の信頼を得るのって難しくない

？》
レイ《…まずないだろうな。》
リンディ「それじゃあこれからの事何だけど、暫くはアースラで保護ってことにしようと思うの。いいかしら？」
レイ「ああ。」
アイザー「まあ、行くとこねぇしな。」
ミコト「姉さんがいいならボクも良いよ！」
フェイト《…ねぇ、クロノ。》
クロノ《何だ、フェイト？》
フェイト《ユニゾンデバイスって？守護獣はアルフみたいな使い魔と似たようなものって解るんだけど…》
クロノ《使用者と融合し、驚異的な能力向上を果たすデバイスのことだ。》
フェイト《そう何だ…》
クロノ「艦長、良いんですか？事情もよく解らないのに。」
リンディ「事情の解らない子達をほおっておく方がいいと言うの？クロノ。」
クロノ「いいえ…。」
リンディ「じゃあ決まりね♪　これから宜しくお願いします。レイさん・ミコトさん・アイザーさん。」
レイ「ああ。」
アイザー「おう！」
ミコト「うん♪」
リンディ「あ、そう言えばレイさん？」
レイ「ん？」
リンディ「あなたの出身世界は何処なのかしら？」
レイ「ああ、第９７管理外世界『地球』だ。因みに日本出身。」
フェイト・アルフ「「……え（ぇ）！」」
リンディ「あらま。」
クロノ「…。」

レイ「…何でそんなに驚くんだ？」

5話　ーアースラへー（後書き）

…どうだったでしょうか？
意見や感想、質問等貰えると嬉しいです。
アクセス数を見る限り私の予想より沢山の人が読んで下さっているようで嬉しいです。有り難う御座います。
いつも感想を下さっている死神帝国様有り難う御座います。
次回からレイのデバイス「アルト」が喋ります。
バルディッシュなどの原作キャラのデバイスも出てきます。

6話　ーアースラにてー（前書き）

ユニゾンデバイス以外のデバイスは〇で表します。それと、私はドイツ語が解らず、英語も苦手なので、簡単な単語以外日本語で書きます。
それでは読んで下さり有り難う御座いました。
次回も読んで下さると嬉しいです。
では。

※若干内容を変更しました

6話　ーアースラにてー

～アースラ～

レイ「…何でそんなに驚くんだ？」
リンディ「ごめんなさい、その世界にフェイトさんの友達が居るの。」
レイ「そうか。」
ミコト「ねぇ、なんて言う子なの？」
フェイト「なのは、高町なのは。」
レイ「！？」
ミコト《…どうしたの？姉さん。》
レイ《……いや、何でもない。》
フェイト「…どうかした？」
レイ「いや、何でも。」
フェイト「そう。」
リンディ「それじゃあフェイトさん、レイさん達を部屋に案内してくれないかしら？」
フェイト「わかった。」

〈フェイトｓｉｄｅ〉

レイ「ああ、第９７管理外世界『地球』だ。因みに日本出身。」
フェイト・アルフ「「……え（ぇ）！」」
…驚きすぎて思わず叫んでしまいました。
レイ「…何でそんなに驚くんだ？」
リンディ「ごめんなさい、その世界にフェイトさんの友達が居るの。

」
レイ「そうか。」
ミコト「ねぇ、なんて言う子なの？」
フェイト「なのは、高町なのは。」
レイ「！？」
あれ？何か驚いてる？知り合いかな。だったら更に驚くけど。
フェイト「…どうかした？」
レイ「いや、何でも。」
あれ？違ったかな？まあそんな偶然なかなか無いかな。
フェイト「そう。」
リンディ「それじゃあフェイトさん、レイさん達を部屋に案内してくれないかしら？」
フェイト「わかった。」
部屋まで案内した後、アルフとアースラを案内しようかな。
…仲良くなれると良いけど。

〈フェイトｓｉｄｅｏｕｔ〉

レイ「…テスタロッサ？」
フェイト「あ、ちゃんと自己紹介しないとね。私はフェイト・テスタロッサ。この子はバルディッシュ」
バルディッシュ（以下バル）〔宜しくお願いします。〕
レイ「ああ。オレはレイだ。で、コイツがオレのデバイス、アルジェントウィング。アルトって呼んでやってくれ。」
そう言って右手の指に付けている指輪を見せる。
アルト〔宜しくお願いします。〕
フェイト「よろしく、アルト。【日本語で喋るんだ。】レイさん…。」
レイ「【何か呼びにくそうだな。】…別に呼び捨てでも何でも構わないぞ？テスタロッサ。」

フェイト「私もフェイトで構いません。」
レイ「…所でテスタロッサ、」
フェイト【…無視されちゃった…。】
レイ「この船は何処に向かっているんだ？」
アルフ「管理局本局だよ。」
レイ「そうか。」
フェイト「…着いた、此処だね。」
レイ「そうか、ありがとう。」
フェイト「…これから私とアルフでアースラを案内したいんだけど…どうかな？」
ミコト「いいね！」
アイザー「ああ。」
レイ「…すまない、少し一人になりたいんだ。そいつ等を案内してやってくれ。」
フェイト「…わかった。」

アルフ「なんだい！あの子は！」
フェイト「私、嫌われてるのかな…」
アイザー「そんな事無いと思うけどな。」
フェイト「…そうなの？」
ミコト「ごめん。姉さんを許してあげてくれないかな？　姉さん、ホントは優しいんだよ。でも、悲しいことがあって、あんなになっちゃって…」
アイザー「確かにあそこまで性格悪くなかったな。」
ミコト「だから友達になってあげてくれないかな？多分この船の中で姉さんが心を開くとしたら、フェイト、君だと思うんだ。」
アイザー「お前、そんなこと考えてたのか。」
フェイト「…わかった。」

ミコト「ありがとう♪」
アルフ「そういえば、あの子って強いのかい？」
ミコト「うん！強いよ！」
フェイト「なら模擬戦してみたいな。」
アイザー「やめときな。今のあんたじゃ勝てねーから。」
アルフ「なんだって！フェイトは強いんだ！負けるわけないよ！」
アイザー「…別にフェイトの事を弱いって言ってる訳じゃねーんだ。」
アルフ「…じゃあどういう意味なんだい？」
アイザー「…ま、一回戦ってみれば解るか。後で頼んでみるといーぜ。」
ミコト「まあその話は姉さんが居るときにしよう？」
アルフ「…そうだね。」
フェイト「…そうだ、レイ達の事ユーノにも紹介しないと。」
アルフ「フェイト、その前に飯にしないかい？」
フェイト「そうだね。」
ミコト「じゃあ姉さんを呼んでくる！待っててて。」
フェイト「部屋の場所、わかる？」
ミコト「うん！大丈夫だよ。」

暫くして、…ミコトがダッシュで帰ってきた。
ミコト「ど、どーしよう！！」
アルフ「な、何があったんだい？」
ミコト「姉さんが部屋に居ないんだ！」
アイザー「…それはヤバいな。」
フェイト「どうして？」
アイザー「…レイは凄まじい方向音痴なんだ。ぜってー迷子になってるな、こりゃ。」
フェイト・アルフ「「……。」」

〈レイside〉

…此処の奴らは良い奴ばっかみたいだな。
…だが、オレみたいな人殺しは一人でいないと…幸せになんてなって良いわけ無いんだからな。
レイ「…なあ、アルト。」
アルト〔どうしましたか、マスター。〕
レイ「私は…いや何でもない。」
アルト〔そうですか。〕
レイ「気分転換に船内でも見て回るか。」
アルト〔さっき皆さんと一緒に行けば良かったのではありませんか？〕
レイ「…それを言わないでくれ。オレも今思った。」

オレは捨てたんだ、弱い『私』を。だから、…どうすればいいか、なんて他人に聞くわけには、相棒（デバイス）にだってそんな弱気な事、聞く訳にはいかないんだ。

…オレは今、かなり困っている。
レイ「困ったぞ、アルト。」
アルト〔どうしましたか？マスター。〕
レイ「迷った。」
アルト〔…またですか。〕

〈レイsideout〉

レイ「どうしようか？アルト。」
？？？「ねぇ困ってるようだけど、どうしたの？」
レイ「ん？誰だ？」
？？？「僕はユーノ。ユーノ・スクライア。君は？」
レイ「オレはレイ。今日この船に保護された。」
ユーノ「ああ、君がイーリスにいた人？」
レイ「そうだ。」
ユーノ「で？困ってたようだけど。」
レイ「…艦内を見て回ろうとしたんだが、どうも迷子になってしまった。」
ユーノ「僕で良かったら案内するけど…」
レイ【このまま迷ってる訳にはいかないしなぁ】「ああ、お願いする」

～その頃～

リンディ「この件はとりあえず保留かしらね。」
クロノ「そうですね、艦長。」
エイミィ「何か訳ありって感じの子達ですよね。」
クロノ「だが現状では判断出来ない。」
リンディ「：まあ何とかなるわよ♪そう言えば、なのはさんに会いに行く日取りが決まったわ。連絡してあげて♪」
エイミィ「解りました。」
クロノ「やっとなのはに会いに行けますね艦長。」
リンディ「ええ♪」
エイミィ「！！？艦長！」

リンディ「どうしたの、エイミィ？」
エイミィ「なのはちゃんと連絡を取ろうとしたんですが、広域結界が張られていて取れません！」
リンディ「何ですって！！すぐ、なのはさんの元へ向かって！」
エイミィ「はい！」
リンディ「クロノ、急いで子供達を此処へ集めて！！」
クロノ「はい！」

～地球～

〈なのはｓｉｄｅ〉

私、高町なのは。割と最近まではごくごく平凡な小学三年生だったんですが、春先に起こったとある事件がきっかけで魔法使いになってしまいました。
私に魔法と幾つもの出会いや勇気をくれたあの時のみんなとは、今は少し離れ離れ。
でも、きっとまた直ぐに会えるから。

平和に過ごしていた私ですが、今、大ピンチです。

〈なのはｓｉｄｅｏｕｔ〉

？？？「うらーー！」
レイジングハート（以下レイハ）〔Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ〕
？？？「…っ、ぶち抜けーー！！」
？？〔Ｒｏｇｅｒ〕

……バリンッ
――ドカン
…ドサッ

???「ハァ、ハァ、ハァ…」
ガシャン…カラカラ
襲撃者は武器を振り上げる。
なのは「はぁ、はぁ、はぁ…」
なのは【…こんなので終わり？　嫌だ、ユーノ君・クロノ君…フェイトちゃん！！】

ガシンッ

なのは「？」
フェイト「…」
ユーノ「ゴメンなのは、遅くなった。」
なのは「…ユーノ…君。」
???「っ仲間か。」
ガシャンッ
バル〔Ｓｃｙｔｈｅ　Ｆｏｒｍ〕
ガチャン
フェイト「…友達だ。」

6話　ーアースラにてー（後書き）

読んで下さって有り難う御座います。今回は結構長く書けたかなと思います。
レイのデバイス『アルト』ですが、日本語で話します。（因みにまだ出ませんがもう一つのデバイスも）それは、アルトも　元々ドイツ語だったのですが、レイはドイツ語が解らずコミュニケーションがとれなかったため、シアンが改良したという設定です。

7話　ー再会<;1>;ー

～アースラ～

フェイト「何があったんですか？リンディ提督。」
リンディ「ちょと待ってくれるかしら？」
クロノ「ユーノが来るまで待ってくれ。」
フェイト「わかった。」

タッタッタ…
ユーノ「何があったんだ？クロノ。」
ミコト「あ！姉さん！良かった…。」
アルフ「ユーノと一緒に居たのかい？」
レイ「…迷ってな、案内して貰ったんだ。」
フェイト・アルフ【【ホントに迷ってたんだ（ねぇ）…】】
リンディ「揃ったわね、説明するわ。」

リンディ「…と言うわけで今なのはさんの所に向かっているの。」
フェイト「…。」
アルフ【…フェイト…】
リンディ「フェイトさんユーノ君、着いたらなのはさんの所に急いで向かって頂戴。」
フェイト・ユーノ「はい。」
アルフ「勿論アタシも行くよ！」
リンディ「ええ。」
レイ「…オレも出よう。」
みんな「え？」
レイ「…これから世話になるんだ、少し位手伝う。」
アイザー【少しなんだな…】

ミコト《姉さん！大丈夫なの？実戦になるかも知れないんだよ？模擬戦ならまだしも《大丈夫だ。》でも！》
レイ《アレは封印してある。侵蝕や負担も軽減出来ている。》
ミコト《軽減で無くなった訳じゃあ無いんでしょ！》
レイ《…心配なら一緒に来い。》
ミコト【頑固なんだから】《解った。》
ミコト「じゃ、ボクも行くよ。」

リンディ「…そうねお願いするわ。」

～地球～

フェイト「民間人への魔法攻撃、軽犯罪では済まない罪だ。」
？？？「何だテメー、管理局の魔導師か？」
フェイト「管理局嘱託魔導師、フェイト・テスタロッサ。　抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して。」
？？？「誰がするかよ！」
ダッ、
フェイト「ユーノ、なのはをお願い！」
ユーノ「うん。」
ダッ

なのは「ユーノ君」
ユーノ「うん」
なのはに魔法をかける。
ユーノ「フェイトの裁判も終わって会いに行く日取りも決まったから、なのはに連絡しようとしたんだ。そしたら通信は繋がらないし、

広域結界は出来てるし、だから慌てて僕達が来たんだよ。」
なのは「そっか…ごめんね…ありがとう。」
ユーノ「あれは誰？どうしてなのはを？」
なのは「わかんない…急に襲ってきたの。」
ユーノ「でももう大丈夫。フェイトもいるし、アルフも居るから。」
なのは「…アルフさんも？」

フェイト「バルディッシュ。」
バル〔Ａｒｃ　Ｓａｂｅｒ〕
フェイト「…はあ！」
フェイトが斬撃を飛ばす
???「グラーフアイゼン！」
グラーフアイゼン（以下グラ）〔Ｓｗａｌｌｏｗ　Ｆｌｉｅｒ〕襲撃者は追尾弾を撃つ
???「障壁！」
グラ〔Ｔａｎｋ　Ｂａｒｒｉｅｒ〕
バシンッ

フェイトはそれを斬る。ドカンッ
その隙に
アルフ「バリアー　ブレイク！」
ピキッピキッ…バリンッ
障壁を破壊する。
???「この…！」
アルフに打ちかかる。
アルフはシールドを張るが、
アルフ「うわぁ―！」
吹き飛ばされる。

???「んっ」
フェイトが斬りかかり、
アルフがバインドをかけようとするが、
グラ〔Ｈｏｒｓｅ　Ｓｐｅｅｄ〕
避ける。
その隙にフェイトが斬りかかる。
フェイト「はぁぁ―！」
ガキンッ

???【クソッ、ぶっ潰すだけなら簡単何だけど、それじゃあ意味ねーんだ！‥魔力を持って帰らないと。…カートリッジ残り二発‥やれっか？】

なのは「アルフさんも来てくれたんだ…。」
ユーノ「後もう二人居るけどね。」
なのは「そうなんだ‥」
ユーノ「クロノ達もアースラの整備を一旦保留にして動いてくれてるよ。」

～アースラ～

ザザー
リンディ「…」
エイミィ「結界の解析、まだ出来ない？」
船員「解析完了まで後少し！」
クロノ「…術式が違う。ミッドチルダ式の結界じゃないな。」

エイミィ「そうなんだよ。どこの術式だろう？これ。」
アイザー【ベルカ式じゃねーか！大丈夫なのか？こいつら。】

～地球～

バチンッバチンッ、ガシン
フェイト「くっ」
？？？「このォ！うあっ！」
アルフ「くぅ！」
襲撃者はアルフのバインドにかかった。
？？？「ぐぅ、くっ！」【クソッほどけねぇ！】
ガチャン、
フェイト「終わりだね。名前と出身世界、目的を教えて貰うよ。」
？？？「くぅぅ、くぁぁ！」
アルフ「…？…！！何かヤバいよ！フェイト！！」
シュ、ガシャン！
フェイト「ぐぁぁ！」
？？？「シグナム！」
？「のわぁぁ！」
ガシン
アルフ「うっ」
バシンっ
アルフ「うぁぁ！」
シグナム「レヴァンティン、カートリッジロード」
レヴァンティン（以下レヴァン）〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
ーガシャン
ボワッ！
シグナム「紫電一閃！」
はあぁぁ！！

フェイト「はっ！」
ガシンッ、スパン！
シグナム「うぁぁっ！」
フェイト「あ！」
ガキンッ
シグナム「！！？」
レイ「しっかりしろ、テスタロッサ。」
フェイト「レイ…」
シグナム【！止められた？！】
ザッ
一旦襲撃者の元まで下がる。
？「大丈夫かシグナム。」
シグナム「あぁ、大丈夫だザフィーラ。」

アルフ「フェイトー！大丈夫かい！」
フェイト「大丈夫だよ、アルフ。」

シグナム「どうした、ヴィータ。油断でもしたか？」
ヴィータ「うるせぇよ！こっから逆転するとこだったんだ。」
シグナム「そうか。それは邪魔したな、済まなかった。」
そう言ってバインドを壊す。
シグナム「だがあんまり無茶をするな。お前が怪我でもしたら、我等が主も心配する。」
ヴィータ「解ってるよ！もう。」
シグナム「それから、落とし物だ。」
ヴィータ「うぅ。」
シグナム「破損部位は直しておいたぞ。」
ヴィータ「ありがと、シグナム。」

シグナム「状況は実質三対三とみていいだろう。一対一なら我等ベルカの騎士に」
ヴィータ「負けはねぇ！」
ヴィータ「…あれ？闇の書が…無い！」

ユーノ「状況があまり良くない。僕は援護にいくよ。」
なのは「フェイトちゃん…」
なのはに回復と防御の結界魔法がかけられる。
ユーノ「回復と防御の結界魔法。なのはは絶対、此処から出ないでね。」
なのは「うん。」
ザッ

フェイト「ありがとう、レイ。」
レイ「戦いの最中だ、油断するな。」
フェイト「うん。ごめん。」
ミコト「姉さーん！間に合ったね！」
レイ「ああ。」
アルフ「フェイト、バルディッシュは無事かい？」
フェイト「…大丈夫、本体は無事。」
バル〔Ｒｅｃｏｖｅｒｙ〕
ユーノ「みんなー、大丈夫？」
レイ「ああ。」
ユーノ「良かった。」
フェイト「ユーノ、この結界内から全員同時に外に転送、いける？」
ユーノ「うん。アルフと協力すれば、何とか…」フェイト「私が前に出るからその間にやってみてくれる？」
ユーノ「わかった。」

レイ「オレも出よう。ミコトはそいつ等を守るか手伝うかしてやれ。」
ミコト「解った。」
フェイト「アルフもいい？」
アルフ「ちょいとキツいけど、何とかするよ！」
フェイト「それじゃ、頑張ろう。」
ユーノ「うん！」

8話　ー再会<;2>;ー

～フェイトがヴィータと戦っていた頃～

レイ「オレが出るまでも無さそうだな。」
ミコト「そうだね。中々やるじゃん、あの子。」
レイ「…だが二対一で戦ってるからだろう。」
ミコト「…まあね。」
レイ「…！！ヤバいな。行くぞ、アルト」
アルト〔了解しました。ｓｅｔ　ｕｐ〕
バリアジャケットを纏うと、
ダッ、
フェイトの元へ向かった。

～ヴィータが闇の書が無いことに気付く少し前～

？？？「もしもし。」
？？「あ、もしもしはやてちゃん、シャマルです。」
はやて「どうしたん？」
シャマル「すみません、いつものオリーブオイルが見つからなくて、ちょっと遠くのスーパーまで行って探してきますから。」
はやて「おぉ、別にええんよ、無理せんでも。」
シャマル「出たついでにみんなを拾って帰りますから。」
はやて「そうか」
シャマル「お料理お手伝い出来ませんですみません。」
はやて「あはっ、平気やて」
シャマル「なるべく急いで帰りますから。」
はやて「あっ、急がんでええから。気いつけてな。」

シャマル「はい、それじゃあ。」
その手には闇の書が握られている。
シャマル「そう：なるべく急いで確実に済ませます。　クラールヴィント、導いてね。」
クラールヴィント（以下クラ）〔Ｙｅｓ．　Ｐｅｎｄｕｌｕｍ　ｆｏｒｍ〕
シュゥゥカチャン、

～レイとヴィータ～

ガキンッガキンッ、ガシャン
ヴィータ「ちっ！【コイツもベルカの騎士じゃねーか！でも負けねぇ！】グラーフアイゼン！カートリッジロード！」
グラ〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
ガシャン、
ヴィータ「うらぁぁ！！」
ガキンッ
ヴィータ「ぶちぬ」
アルト〔Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ａｃｃｅｌ〕
シュッ
ヴィータ「な？！、後ろかぁ！」
レイ「アルト、カートリッジロード。」
アルト〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
しかし、声が返ってきたのは前。
ヴィータ「な？！」
レイ「遅い」
ガシャン、
ガシャン、

ヴィータ【カートリッジシステムが二つ？！】
ガチンッ
ヴィータ【なっ！二本になりやがった！】
ボワッ！
レイ「焔、連撃迅。」
ザシッ
ヴィータ「ぐはっ、【投げやがった‥】」
ザシッ
右手に持っていた方を投げ、間を置かず左手に持っている方で斬りつける。
バシンッ
ヴィータ「‥！くっ、」
初めの一撃目はくらったものの、二撃目は障壁を張って耐える。
ヴィータ「はぁはあ。」
レイ「‥油断大敵、だぞ？」
ジャラッ
ヴィータ「？‥！！」
グサッ
さっき投げた剣を鎖を短くし引き戻した。
ヴィータ「ぐはっ！」
更に其処に蹴りを入れる。
ヴィータ「がはっ、」
ズドンッ
バシィィ、カランカラン。
レイ「安心しろ、急所は外しといた。」
……全く容赦というものが無かった。
ヴィータ「はぁはあ、かはっ、…クソ‥」
レイ「まだ立つか。」
ヴィータ「あたし達は負ける訳にはいかねーんだよ！」

～フェイトとシグナム～
ガチャンッ！バチバチッ
フェイト「くっ！」
シグナム「…！」
カシャン
少し間合いを取る。
バル〔Ｐｈｏｔｏｎ　Ｌａｎｃｅｒ．〕
スフィアを四つ発生させる。
シグナム「レヴァンティン、私の甲冑を。」
レヴァン〔Ｔａｎｋ　Ｓｐｉｒｉｔ〕…ガシャン
フェイト「打ち抜けファイア！」
シュドーン
シグナムにスフィアを放つ。
しかし全く効かない。
シグナム「魔導師にしては悪くないせんだ。だがベルカの騎士に一対一を挑むには…まだ足りん！！」
ダッ―キィン―
フェイト【何処に？】
―スゥ
フェイト【あ！】
ジャシン、
バリアを張るが、
…バリン、ガシンッ
バルディッシュで防ぐが本体に当たる。
ガチャン
シグナム「レヴァンティン！たたっきれ！！」
レヴァン〔Ｒｏｇｅｒ〕
シグナム「はあぁ！！」

ガキンッ
バルディッシュで防ぐがまた、本体に当たり、
ミシッミシッ、パキッ
ひびが入り、
ドーン：
吹っ飛ばされた。
ガシャン！！
なのは「フェイトちゃん！！」
フェイト「あぁ：くっ、」

～ユーノ、アルフ、ザフィーラ～

ユーノ「……」
ザフィーラ「はあぁぁ！！」
ザフィーラが殴りかかるが、
バシンッ
ミコト「させないよ。」
ミコトが防ぐ。
ユーノ「：転送の準備は出来てるけど、空間結界が破れない。アルフ！」
アルフ「こっちもやってんだけど、この結界めちゃくちゃ堅いんだよ！」

～フェイトとシグナム～
：ガチャン
レヴァン〔Ｒｅｌｏａｄ．〕
フェイト【：あれだ、あの弾丸、あれで一時的に魔力を高めている

んだ。】
シグナム《ヴィータ、苦戦しているようだが大丈夫か？》
ヴィータ《はっ！こんなやつ、あたし一人で十分だっ！！》
シグナム《解った、無理はするなよ。》
シグナム「終わりか？ならばじっとしていろ、抵抗しなければ命までは取らない。」
フェイト「！誰が！！」
シグナム「いい気迫だ。私はベルカの騎士、ボルケンリッターが将シグナム。そして我が剣、レヴァンティン。お前の名は？」
フェイト「ミッドチルダの魔導師、時空管理局嘱託、フェイト・テスタロッサ。このこはバルディッシュ。」
シグナム「テスタロッサ…それにバルディッシュか。」

ミコト「ぐあぁ！」
ザフィーラ「ウラあぁ」
アルフ「うあ〝ぁ」
ドサッ

ババババンッ
シグナム「はあぁぁ！！」
フェイト「っ！」
バシンッバシンッバシンッ！

ヴィータ「ウラあぁ！！」

ガシンッ
レイ「ちっ、【中々しぶとい。】」

バシンッ　ガシンッ
なのは「…助けなきゃ、うっ！…」
カツ、カツ、カツ、
なのは「痛っ、私がみんなを…助けなきゃ。」
レイハ〔Ｍａｓｔｅｒ．〕
なのは「え？」
レイハ〔Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｍｏｄｅ．　Ａｃｃｅｌｅｒａｔｉｏｎ．〕
バシンッ、ガバッ
なのは「レイジングハート…。」
レイハ〔撃ってください　スターライトブレイカーを〕
なのは「そんなっ無理だよそんな状態じゃあ！」レイハ〔撃てます〕
なのは「あんな負担のかかる魔法レイジングハートが壊れちゃうよ！！」
レイハ〔私はあなたを信じています。……だから、私を信じてください〕
なのは「レイジングハートが私を信じてくれるなら、私も信じるよ。」

そう言ってレイジングハートを構える。

なのは《フェイトちゃん、ユーノ君、アルフさん、後…》
ミコト《ミコトだよ》
レイ《レイだ》
なのは《私が結界を壊すから、タイミングを合わせて転送を！》

ユーノ《なのは！》
アルフ《なのは、大丈夫なのかい？》
フェイト《…》
なのは《大丈夫！スターライトブレイカーで撃ち抜くから！》
なのは「レイジングハート！カウントを！」
レイハ〔Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．〕
ピカアァ
レイハ〔Ｃｏｕｎｔ　９．〕
シグナム「なっ！」
フェイト「はぁ！」
レイハ〔８〕
レイハ〔７〕
ヴィータ「はっ！」
ジャキッ
レイハ〔６〕
レイ「…行かせんぞ。」
レイハ〔５〕
ザフィーラ「ん！」
ミコト「はあぁぁ！」
レイハ〔４．３．３．３．３…〕
なのは「レイジングハート、大丈夫？」レイハ〔…Ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．…Ｃｏｕｎｔ　３．２．１．
なのは「なはっ！！！」
ふら…
フェイト「なの…は？」
…胸から手が生えていた。

シャマル「しまった、はずしちゃたぁ。…ふっ」
なのは「うあぁぁ。」

フェイト「なのはぁぁ！！」
ジャキン
シグナム「‥行かせん。」

シャマル「リンカーコア、捕獲！　収集開始！」
闇の書〔Ｃｏｌｌｅｃｔｉｎｇ〕

なのは「あ、あ、あぁ‥【なっ何？‥でも、撃たないと‥】」
レイハ〔Ｃｏｕｎｔ　０〕
なのは「す、スターライトぉ‥ブレイカー！！」
ドカーン！！
バギンッ

～アースラ～

船員「結界、破れました！映像来ます！！」
バチン
エイミィ「な、何これ！？どういう状況！？」
クロノ「…これは…こいつらは…」
アイザー「…」

なのは「う‥」
…バタンッ

シグナム《結界が抜かれた！離れるぞ。》
ザフィーラ《心得た。》
ヴィータ《シャマルゴメン、助かった。》
シャマル《うん、一旦散っていつもの場所でまた集合！》

エイミィ「あぁ、逃げる！転送の足跡を！」
船員「いまやってます！！」
クロノ「！！あれは！」
リンディ「いけないわ！！急いで向こうに医療班をとばして！！」
船員「中継転送ポート、開きます！」
リンディ「それから、本局内の医療施設の手配を！！」
船員「了解です！」

エイミィ「ああ！もう！！…ごめん、クロノ君。しくじった……クロノ君？」
クロノ「第一級捜索指定遺失物、ロストロギア、闇の書…」
エイミィ「クロノ君…知ってるの？」
クロノ「ああ。知ってる…少しばかり嫌な因縁があるんだ。」

8話　ー再会<;2>;ー（後書き）

レイが使った魔法や技について説明します。

Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ａｃｃｅｌ　（インフィニットアクセル）
ベルカ式の高速移動魔法。フェイトやなのはが使うソニックムーブやフラッシュムーブにあたります。

焔連撃迅（ほむられんげきじん）
右手に持った剣を投げ、間をおかず左手に持った剣で斬りつける。
その後、チェーンを短くするか引き戻すかして背中に突き刺す、もしくは斬りつける。

結構怖い技になってしまいました…。

戦闘を書くのは苦手なので分かりにくかったら、ごめんなさい。

読んで頂いて有り難う御座います。
では。

9話　ー引っ越しと小学校<1t;1>ー

〜時空管理局本局〜
ーデバイスルームー

アイザー「酷いな。これフェイトのデバイスだろ？後もう一つは高町だったか？の奴。」
レイ「ああ。…アルト」
アルト〔何ですか？マスター。〕
レイ「今回の戦い、どうだったと思う？」
アルト〔…今回の戦いはデバイスの性能の差が色濃く、勿論それだけでは無いのですが、なので彼らはカートリッジシステムの搭載を望むと思われます。〕
レイ「インテリ型に搭載して大丈夫なのか？」
アルト〔今の管理局の技術では使用者の負担が大き過ぎます。〕
レイ「シアンさんがくれたデータにデバイスに関する自分の研究データもあったろ、それを使えばどうだ？」
アルト〔大きく改善が見込めます。〕
レイ「ならあいつ等へ送ってやれ。…オレ等から貰ったとか言わないよう釘を刺しとけ。」
アルト〔了解しました。〕
アイザー「何で其処までしてやるんだ？」
レイ「見知った奴が困ってんの放っとくのは寝覚めが悪いだろ。」
アイザー「ま、そうだな。【なんだかんだ言っても元はお人好しだもんなーレイは。】」
レイ「…行くぞ。」
ビーン
ユーノ「あ、レイ。」
アルフ「あんた達こんな所で何してるんだい？」

レイ「…少し用が有っただけだ。」
そう言ってデバイスルームを後にする。
アルフ「相変わらず無愛想だねぇ。」

その頃ーなのはとフェイトー

医者「さすが、若いね。もうリンカーコアの回復が始まっている。
ただ暫くは魔法が殆ど使えないから気をつけるんだよ？」
なのは「はい！ありがとうございます。」
ビーン
医者「ではこれで。」
医者は出て行き、
ビーン
なのはとフェイトの二人になる。
なのは「フェイトちゃん…」
フェイト「なのは…」
なのは「あの、ごめんね。折角の再会がこんなで。怪我大丈夫？」
フェイト「う、うん、こんなの全然。それよりなのはは？」
なのは「私も平気。フェイトちゃん達のお陰だよ、元気元気♪」
フェイト「…」
なのは「・フェイトちゃん？…フェイトちゃあっ！」
フェイト「なのは！」
歩こうとしてふらつくなのは。
なのは「あはは、ごめんまだちょっとフラフラ。」
フェイト「うん…」
なのは「助けてくれてありがとう、フェイトちゃん。それから、また会えて凄く嬉しいよ！」
フェイト「！うん、私も。なのはに会えて嬉しい。」

フェイト「なのは、デバイスルームに行ってみよう。」
なのは「うん。レイジングハート、大丈夫かな…」

フェイト「あ、レイ。」
レイ「…」
フェイト【うっ、無視されちゃた…】
アイザー「すまねーフェイト。今レイの奴何言っても聞こえてないみたいなんだ。後で謝りに行かせっから許してやってくれ。」
フェイト「うん、わかった。【アイザーって普通の人間サイズにもなれるんだ。】」
スタスタスタ…
なのは「フェイトちゃん、レイちゃんってフェイトちゃんの友達なの？」
フェイト「…なれたら良いなって思ってる。」
なのは「そっか♪私もなりたいな！後で紹介してくれる？」
フェイト「うん！」

アイザー「レイ！レイ！」
ミコト「姉さーん、アイザー！」
アイザー「ちょうどいいとこに来た、レイがいくら呼びかけても反応しないんだ。」
ミコト「そうなの？姉さん、姉さーん？」
レイ「…」
スタスタスタ…
ビーン
ミコト「…取り敢えず部屋に着いたね。」

アイザー「どうしたんだよ、レイ！」
レイ「ぐっ、」
うずくまる。
ミコト「どうしたの！姉さん！」
レイ「ゴホッ、ゴホッ、カハッ、」
アイザー「！！！レイ！血吐いてるぞ。」
レイ「…大丈夫だ、いつものこ…ゴホッ、とだ。」
ミコト「それって全然大丈夫じゃないよね！！」
アイザー「取り敢えずよこになれ。」

暫くして
レイ「…心配かけた。もう大丈夫だ。」
ミコト「…かなり侵蝕が進んでたんだね。」
レイ「…今のところ止める方法は無いんだ仕方ない。」
ミコト「…」
アイザー「何でだ！何であいつ等はもう居ないのに！！【どこまでレイは苦しまなきゃいけないんだ…】」
レイ「あれをオレの中から取り除けない以上話しても無意味だ。」
ミコト「…うん。」
レイ「解ったらこの話は終わりだ。そう言えばアイザー、何かあったか？話しかけてたろ。」
アイザー「そうだった！レイ、廊下でフェイトが話しかけてきたんだが、無視されてヘコんでたぞ！」
レイ「それは悪いことをしたな。謝りに行くか。何処に行った？」
アイザー「多分、デバイスルームだと思うぜ。」
レイ「じゃ行くぞ。」

ーデバイスルームー

ビーン
アルフ「なのは！」
なのは「アルフさん、ユーノ君！」
ユーノ「久しぶりだね、なのは。」
なのは「うん！二人とも元気そうで良かった！」
フェイト「…バルディッシュ…」
ユーノ「いま自己修復をかけてる。それが終わったら一度再起動して部品交換が必要だよ。」
なのは「ごめんね、レイジングハート…」
フェイト「ごめん、バルディッシュ。」

ビーン
アイザー「あ、居たぜ、レイ。」
レイ「さっきは済まなかったなテスタロッサ。」
フェイト「あ、レイ。うん、気にしてないよ。」
レイ「そうか。」
フェイト「なのはに紹介したいんだけど、」
レイ「ああ、構わない。」
フェイト「なのは、アースラで保護してるレイ。地球出身。」
なのは「高町なのは、聖祥大付属小学校の三年生です。宜しくね、レイちゃん！」
レイ「ああ、」
じー
フェイト「どうしたの？なのは。」
レイ「どうした？」
なのは「…何処かであったような…？」
レイ「さあ？どうだろうな。」
フェイト「で、そっちの二人が、」
アイザー「アイザーだ。」

ミコト「姉さんの護衛獣のミコトだよ！」
なのは「うん、宜しくね！」
アルフ「そういえば、あのザフィーラって奴も守護獣って言って無かったかい？」
レイ「ああ、それは俺があいつ等と同じベルカ式魔法を使うからだ。守護獣はミッド式で言う使い魔だ。」
なのは「えぇー！」
レイ「色々気きたいかも知れんが、ベルカ式についてはハラオウンから説明があるだろうから聞いてくれ。」
フェイト「そっか。わかったよ。」
ビーン
クロノ「此処にいたのか。」
なのは「クロノ君！久しぶりだね。」
クロノ「ああ、久しぶりだ。フェイト、面接の時間だ。なのはも一緒に来てくれ。」
フェイト「わかった。」
なのは「え？うん。」
ビーン
レイ「じゃ、オレは暫く部屋で休んでるよ。」
アイザー「ああ、わかった。」
ミコト「何かあったら起こしにいくね！」
レイ「ああ、頼んだ。」

１０話　ー引っ越しと小学校＆１ｔ；２＆ｇｔ；ー

リンディ「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストロギア『闇の書』の捜索及び魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました。」

レイ「夜天の書じゃないのか…？【ま、調べてはみるか。】」

ユーノ「…？」

リンディ「ただ肝心のアースラがしばらく使えない都合上、事件発生地の近隣に臨時作戦本部を置くことになります。分割は、観測スタッフのアレックスとランディ。」

アレックス・ランディ「「はい。」」

リンディ「ギャレットをリーダーとした捜索スタッフ一同。」

捜索スタッフ「はい。」

リンディ「司令部は私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、フェイトさん、レイさん、以上三組に別れて駐屯します。因みに司令部はなのはさんの保護を兼ねて、なのはさんのお家の直ぐ近所になります♪」

なのは「えっ、」

なのは・フェイト「「あっ、」」

なのは「わー！」

レイ「うるさくなりそうだ…」

ミコト「ハハハ…」

～地球～

なのは「うわ、すご～い！すごい近所だ！」

フェイト「本当？」

なのは「ほら、あそこが私の家！」

リンディ「レイさん、」
レイ「何だ？」
リンディ「協力してくれるのよね？」
レイ「それは良いが、何でお前さんは服を持って詰め寄ってくる。」
リンディ「その格好では目立ってしまうわよ？」
レイ「…解ったからスカートはやめてくれ。」
リンディ「あら～残念。」
レイ【何故そんなに残念がる？】

エイミィ「ユーノ君とアルフ、ミコトはこっちではその姿か。」
アルフ「新形態、子犬フォーム！ついでにミコトも子猫フォーム！」
ミコト「街中で虎が歩いてたら問題があるらしくて。」
ユーノ「なのはやフェイトの友達の前ではこの姿でないと。」
エイミィ「君達も色々と大変だね。」
アイザー「似合ってるぜ！」
ミコト「アイザー、姉さんは？」
レイ「もう少しで着替えて来ると思うぜ。」
フェイト「わぁ～アルフちっちゃい、どうしたの？」
なのは「ユーノ君もフェレットモード久しぶり！」
アルフ「可愛いだろ～？」
フェイト「うん！」
ユーノ「あは、あはは…」
ミコト「あ、姉さん！どう？」
レイ「ん？ああ、可愛いんじゃないか？」
ミコト「ボク男なのに可愛いのか…」
レイ「何かへこましちまったか？」

アイザー「ま、大丈夫だろ。」

リンディ「さて、あ、レイさん？」
レイ「何だ？」
リンディ「フェイトさんと一緒に学校に通って貰うのだけど、名前
レイ・ハラオウンで手続きとっておいたからそう名乗ってね♪」
レイ「…テスタロッサ、お前いくつだ？」
フェイト「？九歳だけど…？」
レイ「…オレは十歳だ。」
フェイト・なのは「「え？」」
アルフ「そうなのかい？！」
ユーノ「気付かなかった」
レイ「すまない、言い忘れて。」
リンディ「あら、どうしましょ、手続きしちゃったわ。」
レイ「まあ、仕方ない。学校も二年位行ってないんだ、問題ないだろ。」
リンディ「まあ、じゃあそういうことで♪」
エイミィ【そんないい加減でいいの！？】
なのは「フェイトちゃん達は何処の学校に通うんですか？」
リンディ「ふふふ、まだ秘密よ♪」
クロノ「なのは・フェイト友達だよ。」
なのは「はーい。」
？「こんにちは。」
？？「来たよ～！」
なのは「アリサちゃん・すずかちゃん！」
アリサ「はじめまして、てのも何か変かな。」
すずか「ビデオメールでは何度も会ってるもんね。」
フェイト「うん。でも会えて嬉しいよ、アリサ・すずか。」
アリサ「うん！」
すずか「私も。」

リンディ「フェイトさん、お友達？」
アリサ・すずか「「こんにちは！」」
リンディ「こんにちは、すずかさんにアリサさん…よね？」
アリサ「はい。」
すずか「私達のこと知ってるんですか？」
リンディ「ビデオメール見せて貰ったの。」
アリサ「そうですか。」
リンディ「良かったらみんなでお茶してらっしゃい。」
なのは「あ、じゃ家のお店で。」
リンディ「そうね。あ、レイさんも連れて行って貰えないかしら？」
なのは「そうします！」
フェイト「呼んでくる！」
リンディ「私もなのはさんのご両親にご挨拶を、ちょっと待っててね。」
アリサ「なのは、レイって誰よ？」
なのは「フェイトちゃんの友達、かな？」
アリサ「かなって？ハッキリ言いなさいよ！」
すずか「まあまあ、アリサちゃん、会えばわかるよきっと。」

バタバタ
レイ「何でオレも行くんだ？」
フェイト「いいから。」
なのは「あ、きたきた。」
レイ「…どーも。レイ・ハラオウンだ。」
アリサ・すずか【【（何？）（どうしたのかな）あの眼帯。】】
アリサ「あ、アリサ・バニングスよ。」
すずか「月村すずかです。」
リンディ「さ、立ち話もなんだから行きましょ♪」

すずか「ユーノ君久しぶりだね！」
ユーノ「キ、キュ～…」
アリサ「あんたのことどっかで見た気がすんのよね。」
アルフ「ア、アゥン…」
すずか「ミコト君？可愛いね！」
ミコト「ニ、ニャン…」
レイ【やっぱりへこんでんな、何でだ？】
カツカツ…
なのは「ん？」

リンディ「…とそんな訳でまた宜しくお願いします。」
士郎「いえいえ、此方こそ。」
バタン
フェイト「リンディ提…リンディさん、これ…これって、」
リンディ「転校手続きとっておいたって話したでしょう？週明けからなのはさんのクラスメートね。」
桃子「あら、素敵！」
士郎「聖祥小学校ですか。あそこは良い学校ですよ。な、なのは。」
なのは「うん！」
桃子「良かったわね、フェイトちゃん、それと？」
レイ「レイです。」
桃子「レイちゃん。」
フェイト「は、はい。ありがとう、ございます。」
レイ「どーも。」
桃子「ふふふ♪【レイちゃんって何処かであったような…気のせいよね。】」

クロノ「ロストロギア、闇の書はリンカーコアを喰うんだ。」
エイミィ「なのはちゃんもその被害に。」
クロノ「ああ。間違いない。闇の書はリンカーコアを喰うと収集した魔力と資質に応じてページが増えていくそして最終ページまで埋めることで闇の書は完成する。」
エイミィ「完成すると：どうなるの？」
クロノ「少なくともろくな事にはならない。」

～夜～
ピピッ
エイミィ「はいはい、エイミィですけど。」
？「あ、エイミィ先輩、本局メンテナンススタッフのマリーです。」
エイミィ「あ、何？どうしたの？」
マリー「先輩から預かっているインテリジェントデバイス二機なんですけど、何だか変なんです。」
エイミィ「え？」
マリー「部品交換と修理は終わったんですけど、エラーコードが消えなくて。」
エイミィ「エラー？何系の？」
マリー「えぇ、必要な部品が足りないって。今データの一覧を送ります。」
ピピッ
エイミィ「あ、きたきた。えっ？足りない部品ってこれ？それにこのプラン：」
マリー「えぇ、二機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けないんです。それでどうしようかと：」
エイミィ「レイジングハート・バルディッシュ本気なの？でも、こ

のプランなら【‥でもこのプランは管理局の技術より高い、いったい何処で？】　ＣＶＫ－７９２　…ベルカ式カートリッジシステム…」

レイハ・バル〔お願いします〕

１１話　―小学校へ行こう！―（前書き）

遂にレイがなのは達の学校に行きます！

11話　ー小学校へ行こう！ー

？「うぅわーん、うわーん。」
？これは夢？小さい頃の…私？
？？「どーして泣いてるの？」
？「…グズッ、なのは、泣いてないもん。」
？？「なのはちゃんって言うんだ。折角公園に居るんだから遊ぼうよ！泣くならその後、ね！」
なのは「う、うん。」
そう言って私の手を引く。
？？「あ、私の名前は……―」

美由紀「なのはー！早く起きないと遅刻するよ！」
なのは「ふぁ？はーい。…なんか変な夢見ちゃったかな。」

〈レイｓｉｄｅ〉

担任「さて皆さん、実は先週急に決まったんですが、今日から新しいお友達がこのクラスにやってきます。海外からの留学生さんです。さ、二人とも入って。」
ガラッ
フェイト「失礼します。」
レイ「…。」
フェイト「フェイト・テスタロッサです…。よ、宜しくお願いします。」
レイ「…レイ・ハラオウンだ。宜しくお願いします。」
テスタロッサがたどたどしく、オレは素っ気なく自己紹介をこなす。

担任の先生が気を効かせてくれたのか、オレ達の席は隣同士となった。
転校生の宿命か休み時間や放課後で、クラスメイトの質問責めに遭った事は言うまでもない。
それを助けてくれたのは高町とテスタロッサの友達、アリサ・バニングスと月村すずかだった。

〈レイｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

〈フェイトｓｉｄｅ〉

アリサ「あんた達、二人が困ってるでしょ！一人ずつ喋りなさいよ。」
すずか「そうだよ、困らせたら駄目だよ。」
子供達「う、そだな（だね）。」
男の子「じゃ、まず俺から。テスタロッサさんは日本語上手だけど誰かに習ったの？」
フェイト「う、うん。まあそんな感じ。」
女の子「二人は友達なの？」
レイ「さあな。」
フェイト「うん、友達だと思う。《レイ、もう少し真面目に答えた方がいいよ。》」
レイ《…めんどい。後は任せた。》
フェイト《えー！》
なのは「ははは…」

レイが無愛想で口が悪いのは解っていたけど…

先生「…じゃあ、この問題を…ハラオウンさん、説いて下さい。」
レイ「んなもん解りません。」

先生「…は？」
フェイト《…レイ？》
思った以上でした。

〈フェイトｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

〈なのはｓｉｄｅ〉

昼休憩になり、屋上でフェイトちゃんとレイちゃんも一緒にお弁当を食べているんですが、
アリサ「あんた、先生にあの口の効き方はまずいわよ！」
アリサちゃんがレイちゃんに説教をしています。
レイ「字が見えなかったんだ仕方ないだろ。」
すずか「片目じゃ見ずらいよね。」
アリサ「じゃあそう言えば良かったんじゃない！」
レイ「なる程。」
アリサ「あんた私を馬鹿にしてんの！」
すずか「まあアリサちゃん、落ち着いて。」
フェイト「レイは馬鹿にしてる訳じゃないから。」
なのは「レイちゃんちょっと？抜けてるからね～。モグモグ」
「高町、物食いながら喋るんじゃない。」
アリサ「あーもう、名字じゃなくて名前で呼びなさいよ！」
少し？騒がしいけどとても楽しいです。

キーンコーン
すずか「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」
なのは「レイちゃんは久しぶりなんだよね。どうだった？」
フェイト「歳の近い子がこんなにたくさん居るの初めてだからなん

だかもうぐるぐるで。」
なのは「ははは。」
アリサ「ま、直ぐに馴れるわよきっと。」
フェイト「うん、だといいな。」
レイ「やっぱり久しぶりだからな懐かしい、かな。」
すずか「そっかぁ。」

子供「起立、礼。さようなら。」
全員「さようなら！」
ピリリ、ピリリ
なのは「あ、クロノ君からメールだ。」
クロノ「捜査は順調に進んでいる。君たち三人はこちらから要請するまでは普通に過ごしていてくれ。
追伸1レイジングハートとバルディッシュの修理は来週には終了するそうだ。
追伸2フェイトとレイに寄り道は自由だが夕食の時間には戻ってくるように伝えて欲しい。」

すずか「お邪魔しました。」
アリサ「んじゃ、また明日ねー！」
フェイト「うん。また明日。」
なのは「ばいばーい！」
なのは「まだ時間大丈夫？」
レイ「ああ。」
なのは「じゃ私の部屋に行こ。」
フェイト「ねえ、二人はあの人達の事どう思う？」
なのは「あの人達って闇の書の？」
フェイト「うん。闇の書の守護騎士達の事。」

なのは「私は急に襲いかかれて直ぐ倒されちゃったからよくわかんないんだけど、フェイトちゃんはあの剣士の人と話してたよね。」
フェイト「うん、少し不思議な感じだった。うまく言えないけど、悪意みたいなものを全然感じなかったんだ。」
なのは「そっか：闇の書の完成を目指している目的とか教えて貰えたらいいんだけど、話が出来そうな雰囲気じゃなかったよね。」
フェイト「強い意志で自分を固めちゃうと周りの言葉ってなかなか入ってこないから。私もそうだったしね。」
なのは「あ…」
フェイト「私は母さんのためだったけど、傷つけられても、疑ってしまっても絶対に間違ってないって信じてた時は、信じようとしてたときは、誰の言葉も入ってこなかった。」
なのは「う…」
レイ「…確かに伝えようとしても伝わらないこともあるだろう。」
フェイト「…レイ？」
なのは「レイちゃん？」
レイ「だが、伝えようとしないと絶対に何も伝わらない。だから人は言葉を使うんだ。伝えたいなら話し合えばいい。それが駄目なら力ずくで聞かせるっていう最終手段もある。伝えようという意志が大切なんだ。初めから諦めるなよ。」
なのは「そう…そうだよね！！」
フェイト「うん、その通りだ。私もあの時のなのはみたいにちゃんと伝えたい。そのために戦うことが必要なら迷わず戦えると思う。」
なのは「フェイトちゃん。」
フェイト「なのはが教えてくれたんだよ。そんな強い心を。」
なのは「そんなことないと思うけど。」
フェイト「だから、強くなるよ。想いを貫くために。協力してくれる？レイ？」
レイ「…そうだな、模擬戦ぐらいならしてやるよ。」
フェイト「…ありがと。」

なのは「私ももっと強くなる。頑張ろう、フェイトちゃん！」
フェイト「うん。頑張ろうなのは。」

シャマル「管理局の動きも本格化してくるだろうから今までのようには行かないわね。」
シグナム「少し遠出をする事になるな。なるべく離れた世界での収集を。」
ヴィータ「今何ページまできてるっけ？」
シャマル「３４０ページ。この間の白い服の子でかなり稼いだわ。」
ヴィータ「よっし、半分は越えたんだな！ズバッと集めてさっさと完成させよう。早く完成させてずっと静かに暮らすんだ…はやてと一緒に。」
ザフィーラ「行くか。もう余り時間も無い。」
シグナム「ああ。」

〈一週間後〉

ー管理局本局ー

なのは「ありがとうございました。」
ビーン
ユーノ「なのは！」
アルフ「検査結果、どうだった？」
なのは「無事、完治！」
フェイト「こっちも完治だって。」
フェイトの手にはレイジングハートとバルディッシュが握られていた。

レイ「良かったな二人共。」
なのは・フェイト「「うん！」」

ー対策本部ー

エイミィ「そう、良かったぁ。今何処？」
ユーノ「二番目の中継ポートです。後１０分くらいでそっちに戻れますから。」
エイミィ「そう、じゃあ戻ったらレイジングハートとバリディッシュについての説明を」
ビー、ビー、ビー
エイミィ「あ、こりゃまずい！！至近距離にて緊急事態！！」
ビビビ、
アースラスタッフ「都市部上空にて捜索指定の二名を捕捉しました。現在結界内部で対峙中です。」
リンディ「相手は強敵よ。交戦は避けて外部から結界の強化と維持を！」
アースラスタッフ「は！」
リンディ「現地には執務官を向かわせます！」

12話　ーわからない心ー

リンディ「逃げられてしまったわね。」
クロノ「あの仮面の男、守護騎士達の仲間でしょうか？」
守護騎士をニ名捕捉し結界内に閉じ込めクロノを送り込み戦い、援軍としてなのは達を送り追いつめるが謎の仮面の男の介入や闇の書のページを減らしてまで放った魔法により結界は破壊され逃亡を許してしまったのだ。

リンディ「現時点では解らないわ。それより問題は」
クロノ「レイ：ですね。」

クロノが闇の書を持っていたシャマルを見つけ捕らえようとしたとき仮面の男が現れシャマルを守った。レイは仮面の男が現れる少し前に念話でクロノへ背後に気をつけるよう忠告はしたがそれ以外は誰が何を頼もうと動かなかったのだ。
それに管理局は仮面の男に気づけなかった。だから自分達の思っているより実力があり実践に馴れた騎士だと解ってしまった。故に疑問や疑惑も生まれてしまう。
レイが彼らの仲間と言う可能性もかなり低いながら考えておかなければならない状況になってしまったのだ。
フェイト「…レイ、何で戦わなかったの。」
なのは「あの仮面の人の事、初めから気付いてたよね。」
二人の声から怒りが感じられる。
レイ「ああ。」
フェイト「ならなんで、仲間が困ってるのに加勢しなかったの。」
レイ「…勘違いするなよ。」

フェイト「…え？」
レイの声には鋭い殺気すら感じるほどの怒気が含まれていた。
レイ「オレは自分のやりたいこと、やるべき事しかしない。協力しているのはおまえ等と争うのが面倒だからだ。」
クロノ「なっ、」
レイ「いくぞ。」
レイはミコトと部屋に戻っていった。
アイザー「レイの考えてることはアタシらも解らねぇが全てに協力するとは思うなよ。」
フェイト「…して」
アイザー「ん？」
フェイト「どうして？」
なのは「どうしていきなり…理由が知りたいの。」
アイザー「何言ってんだ、お前ら？まるで理不尽にペットに手を噛まれたみたいな顔して何言ってやがる。」
クロノ「…何だと。」
必死に怒りを抑えている。
アイザー「今までのレイの態度の方がはたから見れば可笑しいんだよ。」
リンディ「…どう言うことかしら？」
アイザー「自分をモルモットにして実験した挙げ句大事な人を惨殺した組織に協力する奴なんて普通居ないだろ。」
「「「「「「「っ！！」」」」」」」
…部屋にいる全員が絶句した。
アイザー「少なくともアタシはアンタら管理局を憎んでるよ。でもレイはまだ出来る範囲では協力するつもりだし管理局に何かしようって気も無いから安心しな。」
そう言って部屋を出て行った。
アイザーが出て行った後部屋は重い空気に包まれていた。

クロノ「さっきの話は本当なんでしょうか。」
リンディ「解らないわ。」
フェイト「でもレイ達が勘違いしてるだけかも。」
リンディ「管理が行き届かず私欲の為に隠れて違法研究をするような輩は居るわ。だからまだ何とも言えないの。」
なのは「そんな、」
クロノ「取り敢えず今は闇の書や守護騎士達の事を優先しなくては。」
リンディ「そうね。レイさん達の事は本人達が話してくれるのを待ちましょう。」

ー自室に戻ったレイ達ー
レイ「…ぐ、ゴホッ、ゴホッ。」
ミコト「大丈夫!?姉さん…。」
ミコトは今にも泣きそうだ。
レイ「…ああ。」
ミコト【絶対嘘だよ…】
ガチャ
アイザー「…っ、大丈夫かっ!?レイ!」
レイ「ああ。」
アイザー「レイ、教えてくれ、やるべき事って何だ?そんな体調なのに…。」
レイ「あいつらが言うところの闇の書に用がある。」
アイザー「何でそんな物に?って聞いてもまだ言わないよな?」
レイ「ああ。」
アイザー「アタシらはレイの命が本気で危いと思ったら止めるぞ!」
ミコト「姉さん!」
レイ「解っている。ところで話したな?アイザー。」
アイザー「すまねぇ、だけど」
レイ「まだ話すにしても早い。これ以上はまだ漏らすなよ?」

アイザー「…わかった。」
レイ「じゃ戻るか。」
ミコト「え？」
レイ「あいつらが何処まで情報を持っているか知りたいんだ。」
アイザー「闇の書についてのか？」
レイ「そうだ。」
ミコト「大丈夫？」
レイ「ああ、体調は落ち着いた。」
アイザー「なら行こうぜ。」

ガチャ
フェイト「…レイ」
レイ「すまないな、気分を悪くして。」
リンディ「いいのよ、じあ今からエイミィにレイジングハートとバルディッシュについて説明して貰うわ。」
なのは・フェイト「「はい。」」
エイミィ「今回その子達にカードリッジシステムを搭載したの。」
アルフ「カードリッジシステムってあいつらが使っている奴かい？」
アイザー「アルトにも付いてるよな。」
レイ「ああ。」
エイミィ「そう。でも本来ならその子達みたいな繊細なインテリジェントデバイスに組み込むようなものじゃないんだけどね、その子達がどうしてもって。本体破損の危険や使用者の負荷も大きくって、でもそれを改善する独自のプランまで作ったんだよこの子達。よっぽど悔しかったんだね。」
なのは「ありがとう、レイジングハート。」
レイハ〔…Ａｌｌ　ｒｉｇｈｔ．〕
フェイト「…バルディッシュ。」
バル〔Ｙｅｓ，ｓｅｒ．〕

エイミィ「モードはそれぞれ三つずつ、レイジングハートは中距離射撃のアクセルと砲撃のバスター、フルドライブのエクセリオンモード。　バルディッシュは汎用のアサルト、鎌のハーケン、フルドライブはザンバーフォーム。負担は軽減できているとは言えフルドライブは使いすぎないようにね。」
なのは・フェイト「「はい。」」
リンディ「問題は彼らの目的よね。」
クロノ「ええ、どうも腑に落ちません。彼らはまるで自分の意志で闇の書の完成を目指しているように感じますし。」
アルフ「うん？それって何かおかしいの？闇の書ってのも用はジュエルシードみたくすっごい力が欲しい人が集めるもんなんでしょ？だったらその力が欲しい人のためにあの子達が頑張るってのもおかしくないと思うんだけど。」
クロノ「第一に闇の書の力はジュエルシードみたいに自由な制御の利くものじゃないんだ。」
リンディ「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない、少なくともそれ以外に使われたという記録は一度もないわ。」
アルフ「あぁ、そっかぁ。」
クロノ「それからもう一つ、あの騎士達闇の書の守護者の性質だ。彼らは人間でも使い魔でもない。」
なのは・フェイト・エイミィ「「「えっ、」」」
クロノ「闇の書に合わせて魔法技術で造られた擬似人格、主の命令を受けて行動するただそれだけのために造られたプログラムに過ぎないはずなんだ。」
フェイト「あの、使い魔でも人間でもない擬似生命っていうと、私みたいな」
リンディ「違うわ！」
間髪入れずに否定する。
リンディ「フェイトさんは産まれ方が少し違っていただけで、ちゃんと命を受けて産み出された人間でしょ。」

クロノ「検査の結果でもちゃんとそう出てただろ。変な事言うものじゃない。」
フェイト「はい…ごめんなさい。」
沈んだ空気を切り替えるため、明るい声でエイミィがいう。
エイミィ「映像を使って説明しようか！」
ピピッ
クロノ「…彼らは闇の書に内蔵されたプログラムが人の形を取ったもの。転生と再生を繰り返し闇の書と共に様々な主の元に渡り歩いている。」
エイミィ「意思疎通のための対話能力は確認されているんだけど、感情を見せたって例は一度も無いの。」
リンディ「闇の書の収集と主の護衛、彼らの役目はそれだけですものね。」
なのは「でも」
レイ「かなり改悪されたんだな。」
フェイト「レイ？」
ミコト「姉さん？」
クロノ「改悪？どういうことだ。」
レイ「本来の名は夜天の書。初めから破壊のみをもたらすものであった訳ではない。」
リンディ「…本当なの？」
レイ「調べてみろ。無限書庫だっけ？あそこならなんか在るだろ。」
アルフ「どうしてあんたが知ってるんだい？」
レイ「夜天の書に用が在るからだ。」
リンディ「どんな用かしら？」
レイ「管理局と敵対する必要はないから安心しろ。んじゃ寝るか。」
リンディ「ちょと！レイさん！！」
フェイト「レイ！！」
ガチャン
謎を残して部屋へ戻ってしまった。

〈フェイトｓｉｄｅ〉

レイは何を考えてるんだろう。
もし、アイザーの言ってたことが本当なら何を想っているんだろう。
レイも管理局（私達）を憎んでるのかな…
それにまだ友達になれてないのかな？名前で呼んでくれないし…
私じゃ力になれないかな支えになれないのかな…

〈フェイトｓｉｄｅｏｕｔ〉

〈なのはｓｉｄｅ〉

あの後、ユーノ君に無限書庫で調べて貰うことに　決まって家に帰りました。
なのは「レイちゃんは何を考えてるのかな？」
ユーノ「僕には解らないよ。今考えても解らないし、ちゃんと話してくれるまで待とう？なのは。」
なのは「そうだね、ユーノ君。お休み。」
ユーノ「お休み、なのは。」

〈なのはｓｉｄｅｏｕｔ〉

なのは「はっ、はっ、」
また小さい頃の夢？何か一生懸命走ってる。この道は海鳴臨海公園…かな？
なのは「今日もいるかな？」
？「あ、おーい！なーさーん！」
なのは「…ちゃん！なーさんって？」

？「嫌だった？」
なのは「そんな事無いよ！」
？「なのちゃんって呼ぼうと思ったんだけど、ななちゃんって友達が居てね間違えそうだからなーさんにしたの！いい？」
なのは「うん！」
？「じゃあ遊ぼ！なーさん。」
暫く遊んでると
？「なーさん何かあったの？悲しそうな顔してるよ。」
なのは「…」
？「ちょっと待ってて！」そう言うと走ってどっか行ってしまった。
１５、２０分位すると鞄を背負って戻ってきた。
時間は昼過ぎから遊び初めてもうすぐ夕方。
なのは「何をするの？」
？「着いてきて！」
そう言って公園で一番大きな木の下まで行く。そして登り始めた。
なのは「危ないよ！…ちゃん！」
やっぱり名前が聞こえない。
？「大丈夫、手を伸ばして！」
そのまま一緒に登ってしまった。所々助けてくれて私一人じゃ登れなかったと思う。あの子は木登りが凄く上手だった。
なのは「わぁーきれい！」
木の上は海に沈む夕日がとてもきれいに見えた。
？「やっと笑った！なーさんは笑ってる方がかわいいよ！」
暫く二人で夕日を見た。
？「緑に囲まれると落ち着くから好きなんだ…なーさん悲しいことがあったら言って！私は公園に居るから！」
なのは「うん！…ねぇ…ちゃん、どうやって降りるの？」
？「任せて！」
そう言うと輪っかになってる紐を私たちの座ってる枝に巻く。
なのは「なーにそれ？」

？「すりんぐって言うんだって。私達がぶら下がっても絶対切れないんだって！でこれを付けて」
カチャン
それは金具の付いたロープでした。
？「すごく重かった！でもこれで簡単に降りれるよ！」
そう言ってロープを伝ってスルスルと降りていく。
？「怖くないからなーさんも降りておいで！」
なのは「うん。」
？「…楽しかったね！」
なのは「うん！…明日も遊べる？」
？「うん！待ってるよ！」

ジャカジャンジャン…
なのは「ん、ふあぁ。」
【何か懐かしい夢だったなでも…あの子は誰なんだろう？】
ユーノ「おはよう、なのは。」
なのは「おはよう、ユーノ君…ねぇ、今日の魔法の練習お休みしていいかな？」
ユーノ「うん、たまには休まないと。でも休みたいなんて珍しいね。どうしたの？」
なのは「ちょっと行きたい場所があるんだ。」
ユーノ「僕もついて行っていいかい？」
なのは「うん、行こう。」
ー海鳴臨海公園ー
ユーノ「ここ、いつも練習で来てるよね？なのは。」
なのは「うん。ほらあの木に登りたいの。」
ユーノ「大丈夫なの？なのは。」
なのは「うん。小さい頃悲しいことが在ったとき誰かと登ってたはずなの。」
ユーノ「誰か？はず？」

なのは「うん、あんまりはっきり覚えてなくて、夢に出てきて思い出したんだ…あ！」
ユーノ「どうしたの？なのは？」
なのは「あのロープ！夢と同じだ！」
風雨に晒されて少し？ボロくなっていたけどたしかに在った。
なのは「…よし！」
少し時間がかかったけど何とか登る。
なのは「ふぅ、やっと登れ…」
そこには先客がいた。懐かしげにでも悲しそうに海を見ていた。
なのは「あ、…」
ユーノ「……レイ？」
そこに居たのはレイだった。
なのは【あれっ、レイちゃんだ。今私、誰を呼ぼうとしたんだろう？】
レイ「…ん？誰だ。」
なのは「おはよう、レイちゃん。」
レイ「！ああ、高町か。」
なのは「どうしてここに？」
聞きながら隣に腰掛ける。
レイ「昔登った事があるんだ。」
なのは「私も。夢に出てきて。誰と登ってたかは思い出せないんだけど…」
レイ「そうか。もうここの景色は見れないと思ってんだ。」
なのは「どうして？今見てるし、これからも見れるよ？」
レイ「…そうだな。」
このときなのははレイの言葉の意味が解らなかったが時期知ることになる。
なのは「そうだ、レイちゃん、フェイトちゃんと模擬戦してるんだよね？私ともやってくれないかな？」
レイ「すまない、最近体調が微妙でな。テスタロッサともまだ魔法

抜きでしか手合わせしてないんだ。」
なのは「そっかぁ。」
レイ「ああ。…そうだテスタロッサ達に言っておいてくれ。」

なのは「何？」
レイ「学校サボって町ふらついてるから心配するなって。」
なのは「え？！ちょ、レイちゃん！」
そのまま木からあっと言う間に降りてどこかに行ってしまった。

13話　ー図書館へ行こうー

ー学校ー

フェイト「え、レイに会ったの？！なのは。」
なのは「うん、朝公園でね。『町をぶらついてるから心配するな』って。」
フェイト「良かった。」
すずか「？それって良かったって言うのかな？」
アリサ「どういうことなの？フェイト。」
フェイト「朝起きたらもう何処にも居なくて。みんなで探してたんだ。」
アリサ「みんなが心配してるってのにただ学校サボってぶらついてるって事？！許せないわ！」
すずか「アリサちゃん落ち着いて。でも何で学校に来ないのかな？」
なのは「うーん、なんか今日のレイちゃんいつもと様子が違ったから何か理由があるのかも。」
アリサ「見つけたらお仕置きと説教ね！」
なのは「にゃはは…でもちゃんとお話しないとねフェイトちゃん。」
フェイト「そうだね。【レイ…何を考えているの？】」
アリサ「この話は取り敢えずおしまい！そう言えばフェイトとレイは携帯持って無かったわよね？」
フェイト「うん。」

〈レイside〉

レイ「…まだ1時か。【結構ぶらついたが…どうするかな。ん？】」
アルト〔マスター〕

レイ「人が少ないからって余り喋るなよ。」
アルト〔申し訳ありませんしかしそこは、〕
レイ「図書館だが？」
アルト〔…〕
レイ「心配するな、本が読みたいと言うより懐かしいから寄るだけだ。昔、来たことがあってな。」
アルト〔そうですか。引き止めてしまい申し訳ありません。〕
レイ「気にするな。それより町中では喋るなよ？」
アルト〔了解しました。〕

〈レイｓｉｄｅｏｕｔ〉

〈はやてｓｉｄｅ〉
ー図書館ー

パタン
はやて「ふぅ、【この童話、中々面白いな。】」
カラカラ、
はやて【確かこの辺りに続きの本が、あれ？】
そこには片目に黒い眼帯をした同い年ぐらいの子が居ました。ジーパンとＴシャツを着てその上にパーカーを羽織りマフラーを片手に持っている、なんかずぼらそうな格好をして本棚の前で本を読んでいました。
はやて【なんや見かけん子やな。でもどうしてやろ？悲しそうな眼をしとる。…でも眼帯しとるし怖そうや、話しかけんどこ。】
カラカラ
ちょうどその子の近くの本棚に目当ての本がありました。
はやて【うーん、ちょいと高いな】
車椅子に座るはやてにはその本の在る場所は少し高く必死に手を伸ばす。

はやて「うーん、あ届い」
バラバラバラッ
はやて「キャッ」
本を引き出したと同時に数冊の本がはやてに降り注ぐ。どうやらちゃんと整理されていなかったようだ。
はやては顔を両手で覆い衝撃に備えるが
はやて「？」
一向にやって来ない。
両手をどかすと、自分に覆い被さる眼帯をした子の顔が至近距離に見えた。
？「…大丈夫か。」
はやて「大丈夫や！それより」
？「そうか。！リーファ！？…な訳ないな。」
そう言いながら落ちてきた本を戻していく。
はやて「？あんたは大丈夫なん？」
？「ん？ああ、問題ない。」
はやて「【なんや、怖い人やと思っとったけどいい人やな。】ありがとな。私は八神はやてや。あんたは？」
レイ「オレはレイ・ハラオウンだ。さっきはすまなかったな。知り合いに雰囲気が似てたから」
はやて「ええんよ。それよりそれ本名なん？日本人やろ？外人みたいな名前や。」
レイ「偽名だ。」
はやて「偽名なんかい！本名は？」
レイ「捨てた。」
はやて「捨てたんかい！…なんや変わった子やな。と言うか学校行かんでええの？」
レイ「サボった。」
はやて「何で普通にカミングアウトするんや。突っ込みどころありすぎるで。」

レイ「そうか？」
はやて「そうや。【天然や…この子。】なぁ、此処へはよく来るん？」
レイ「ん？いや昔、小学校あがる前だな、よく来ててな。懐かしいから来てみたんだ。」
はやて「そうなんか。なら会ったこと在るかもしれんな。私は小さい頃から良う来とったから。」
レイ「そうか。」
はやて「ところで・・レイちゃん？」
レイ「何だ？」
はやて「【やっぱ女の子なんや。ちょっと男の子かと思ったで】あのな」
レイ「ぐっ、ゴホッ、ゴホッ、ぐっ」
レイちゃんは突然うずくまってしまった。
はやて「ちょ！？しっかりしぃ！！なぁ！」
私はもう気が動転してしまう。
レイ「…っ、だ、大丈夫、だ…」
はやて「！そうや、救急車、救急車呼ばな。」
するとレイちゃんが私の手をつかむ。
レイ「落ち着け、静かにしろ。私は大丈夫だ。」
はやて「うん。」
レイ「玄関に長椅子が在ったな…行ってくる。」
はやて「あ、何か飲み物買ってくるな。」
レイ「…ああ、済まないが頼む。」
私は自販機で飲み物を買いレイちゃんの所へ行く。
はやて「はい、スポーツドリンクや。」
取り敢えず水分を取りやすいようにアクエ〇アスを買ってきた。
レイ「ありがとう。」
はやて「もう大丈夫なん？」
ゴクゴク

レイ「ん、ああ。失明したが大丈夫だ。」
はやて「それ全然大丈夫や無いやろ！！」
レイ「もうだいぶ前から自分で書いた手元の字すら見えなかったんだ。大した差じゃないよ。」
はやて「十分大したことや！見えると見えないじゃ全然ちゃう！なあ病院行こ？」
レイ「病院に行ってもどうにもならないんだ。この眼も発作も。」
はやて「そんな…」
レイ「学校サボってウロウロしてるのもいつ起こるか解らない発作で心配をかけないためなんだ。周りのみんなは殆ど知らないから。だから誰にも言わないでくれる？」
はやて「…」
レイ「頼む。」
はやて「解った。」
レイ「ありがとう、八神。」
はやて「はやてや。」
レイ「ん？」
はやて「もう友達なんや、はやてって呼ばな言いふらすで？」
悪戯っぽく言ってみる。
レイ「私と来れ以上関わるといつか後悔するぞ？それでもいいの？」
悲しそうな眼。
はやて「私は後悔何てせえへんよ。だからな？レイちゃん…友達になって、くれんか？」
レイ「…ありがとう、：はやて。」
レイを知る人が見たら驚くだろう。この世界に戻ってきて初めてレイは笑っていた。苦笑混じりでは在ったが。
はやて「ははは、そう言えばレイちゃん、ほんと喋り方がまとまらんな。」
レイ「え？」
はやて「気付いとらん？オレって言ったり私って言ったり、ってど

うしたん！？顔真っ青や！」
レイの顔は驚愕に彩られ真っ青になっていた。
レイ「オレは：『私』を捨てた筈なのに：弱い『私』のままだったのか？また」
はやて「しっかりしぃ！一体どうしたんや！？」
軽くパニックを起こしていたレイはその声で正気に戻る。
レイ「…済まない。取り乱した。【弱い『私』のままだったとしても今度こそ…】」
はやて「私は何があったか知らんけどレイちゃんはレイちゃんや！強い弱いは関係あらへんよ！」
レイ「ああ…そうだな。」
レイの眼は元の悲しい眼に戻っていた。
はやて【またあの眼、言わん方が良かったんかな。何思っとるんやろ、レイちゃんは。】
？「にゃーにゃー」
はやて「？わー可愛い！子猫や！」
なでなで
？《姉さん！》
レイ《ミコトか。》
ミコト《緊急事態なんだ、今フェイトが戦ってる！…どうする？姉さん。》
レイ《いやな予感がする、戻るぞ。》
ミコト《解った。》
レイ「悪いなはやて、急用を思い出した。」
はやて「ええよ。そう言えばレイちゃん、当たり前に歩いとるけど見えてへんのに大丈夫なん？」
レイ「ああ、何が何処にあるか大体覚えてるからな。」
なんて事無いように言い切る。
ミコト《？見えてない？》
はやて「そうなんか。【そんな単純でも簡単でもやないやろ。…突

っ込まん方がええかな。】また会えるか？」
レイ「ああ、会えるさ。…またな、はやて。」
はやて「またなレイちゃん。」
こうしてはやてはレイと出会い、別れた。

１４話　ー力の片鱗<1>ー（前書き）

すみません！大変遅くなりました。
その上短いですごめんなさい。

１４話　ー力の片鱗<1>ー

ーレイとはやてが図書館で会った頃ー

なのは「レイちゃん、帰ってこないね。」
フェイト「うん。」
エイミィ「ホント、どこ行っちゃったんだろう？そう言えばリンディ提督は？」
フェイト「なんか新武装の追加が終わったからアレックス達と一緒に試験航行だって。」
エイミィ「新武装ってぇと…アルカンシェルかな。あんな物騒なもの最後まで使わずに済むといいけど。」
なのは「クロノ君も居ないですし、戻っるまではエイミィさんが指揮代行だそうですよ。」
アルフ「責任重大～！」
エイミィ「それもまた物騒な」
アイザー「大丈夫かよ…」
ミコト「ハハハ…」

エイミィ「ま、とは言え非常事態なんて早々起こる訳が」
ビー！ビー！
エイミィ「…嘘」
アイザー「…起こっちまったな…」

レイ「ミコト、どういう状況だ？」
ミコト「えっと、今、フェイトがシグナムって人と、アルフはあの

ザフィーラって奴と交戦中だよ。」
レイ「そうか。」
ガチャ
なのは「！！レイちゃん！」
エイミィ「良かった、帰ってきてくれて。」
レイ「…それより状況は？」
エイミィ「今フェイトちゃんとアルフが交戦中、で今新たな反応があったからなのはちゃんに出て貰うところ。」
レイ「フェイトはリンカーコアを狙われる可能性があるな。」
なのは「え！？」
レイ「お前は一回さてるから心配ないが…行くか」
なのは「何処に？」
レイ「ミコトは控えていろ、アイザー一緒に来い。」
アイザー「ああ。」
ミコト「姉さん！」
レイ「アイザーが一緒だから大丈夫だ。」
なのは「レイちゃん！！」
レイ「何処かなんて決まってるだろ、…フェ・テスタロッサの所だ。」

ガキンッガキンッ
シグナム【ここに来て目で追えない攻撃が出てきた】
フェイト【スピードで誤魔化しているけど…長くはもたない…やるしかないかな。】

シグナム【次で】
フェイト【次の攻撃で】

シグナム・フェイト【【決める！】】

シグナム「はあああぁ！」
フェイト「はああ…かはっ！」

勝負が決するその前に

シグナム「な！！」

フェイトの体から

フェイト「な…にが…」

手が生えた。

シグナム「テスタロッサ！」

仮面の男「…さあ、奪え」

シグナム「貴様…！！」
仮面の男「おまえ達が優先すべき事は何だ？……さあ、うば」
ザシッ
仮面の男「なっ、」
フェイトのリンカーコアを捉えていた腕が宙を舞い、
ドゴッ
仮面「ぐっ、」
ザザァ
腹に重い蹴りをくらい、数メートルとばされる。

「どうも」
その場に崩れ落ちたフェイトを左腕で抱え、
レイ「俺の知り合いが世話になったな」
レイは現れた

１５話　ー力の片鱗<2>ー（前書き）

遅くなってごめんなさい。
今回はアルトの二つ目のフォルムがでます。

15話　―力の片鱗<2>―

レイ「オレの知り合いが世話になったな。」
バシィ
仮面「くっ！バインド…」
レイ「三重に掛けた。そう簡単には解けん。」
そう言いながらさっき斬り飛ばした仮面の男の腕を拾い、その手が掴んでいるリンカーコアをフェイトに戻す。
レイ「アイザー、頼む。」
アイザー「おう、わかった。」
人間サイズになり、フェイトを受け取る。

レイ「さて、ほら」
男の腕を男の居る辺りに投げる。

レイ「お前の目的は何だ？」
仮面「はっ、誰が言うか。」
レイ「まあ、闇の書の封印といった所だろう。そのために収集を手伝っている。」
仮面「…だとしたら何だ？」
レイ「闇の書、いや夜天の書を直せるといったら？」
シグナム「【夜天の書？】直すとはどういう事だ。」
レイ「欲ある者に改悪され、今のままでは破壊しかもたらさない。」
シグナム「それを信じろと？」
レイ「信じるかはおまえ等の勝手だ。」
仮面「信じられるか！直せるだと！」
バチンッ
バインドを解除し、

ピカァッ
強い光が放たれる
レイ「くっ」
シ…ン
レイ「逃げたか。…お前はどうする？ボルケンリッター。」
シグナム「手ぶらで帰るわけにはいかないのでな…いつぞやはヴィータを可愛がってくれたし、相手になって貰おう。」
ジャキ
レヴァンティンを構える。
レイ「はぁ。アルト、フォルムチェンジ　ハンドシュ」
アルト〔ＯＫ．マスター、ハンドシュフォルム〕
ガチャンガチャン
シグナム「剣ではないのか。」
レイ「ああ、悪いな。」
シグナム「私はベルカの騎士、ボルケンリッターが将シグナム。そして我が剣、レヴァンティン。お前の名は？」
レイ「オレは今、レイと名乗っている。本名は捨てた。お前等と同じベルカの騎士だ。で、こいつはアルジェントウィング。」
アルト〔アルトとお呼び下さい。〕
シグナム「レイ、それにアルトか。」

レイ「では」
ガチャ
シグナム「いざ尋常に」
レイ・シグナム「「勝負！」」

レイ「はああっ」
正面から殴りかかる。
シグナム【まず様子見だな】

レヴァンティンで防ごうとするが、
アルト〔Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ａｃｃｅｌ〕
シュッ
シグナム【後ろか？】
レイ「はあ！」
しかし、声が返ってきたのは前。
バシッ
体をずらすが、左肩に拳が入る。
シグナム「くっ、【なる程、速いな。】はあぁ！」
今度はシグナムが斬りかかる。
シグナム「…はぁ！」
ガシン
それを左右両方魔力刃を作りクロスさせ受け止める。
シグナム【動きがぎこちないようだが…まさか】
レイはその体制のまま横凪に蹴りを入れ、シグナムは距離を取ることでかわす。

レイ「燃え上がれ」
シグナム「ん？」
パチンッと指を鳴らす。
ガッボワッ
シグナム「！！ぐぁぁ、」
シグナムの左肩を中心に銀色の炎が燃え上がる。
シグナム「くっ【初めのあの時だな…】」
レイ「アルト、カートリッジロード。」
アルト〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
ガシャン
ガシャン
ボワッ
拳が燃え上がる。

「はあぁ！」
シグナム「！」
レイ「焔拳　衝破！」
バゴンッ
シグナムの腹にきまる。
シグナム「ぐはっ」
ザザァ…
バシィィ
カランカラン
「かはっ…【強いのだがな…今度此方から仕掛けよう、違和感の原因、私の考えが正しければ…】レヴァンティン、カートリッジロード」
レヴァン〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
ーガシャン
ボワッ！
シグナム「中々やるな。…だが、」
ダッーキィンー
レイ【…何処だ？】
ースゥ
シグナム「紫電一閃！」
レイ「…？！くっ」

アルト〔Ｂａｒｒｉｅｒ〕
バキッ、バリンッ
ザシュッ
レイ「…ぐぁ」
シグナム「はぁ！」
ザシッ
ザシュッ
バタン…

バシィィ
カラン、カラン
シグナム「万全なお前と戦いたかった。…目が見えてないだろう？」
レイ「…バレてたか。」
シグナム「音を頼りに戦っていたな。たいしたものだ。」
レイ「…早くやれよ。オレはもう抵抗する手段がない。」
シグナム「…済まない、…恨むなら恨んでくれ。」
レイ「目的があるんだろう？戦い、オレは負けた。恨みゃしないさ。…ただ」
シグナム「ん？」
レイ「（リンカーコアを）取ったらすぐ逃げろ。」
グサッ
ズゥ
リンカーコアを抜きとる。
ドサッ
レイの武装は解除され倒れ込む
シグナム「？【どういう意味だ？】」
アイザー「レ、レイ…」
シグナム「…済まな」
アイザー「いいからアンタ、早く逃げろ！！」
シグナム「は？」
ユラ
シグナム「！！」
シグナムは今居た場所を飛び退く。すると、
ドゴンッ
大きな穴があいていた。

シグナムが顔を上げると、
レイ「…」
気を失っているはずのレイが立っていた。

しかし様子がおかしい。
茶色いはずの髪が銀髪に、黒いはずの目が赤色になっていた。
そして足元には赤い魔法陣。

レイ「ぐ、グアァァァ！」
シグナム「くっ！どうなっている！？今は魔力が使えない筈だ！それに何故魔力光が変わっている？」
アイザー「レイの魔力光は赤みを帯びた銀色だ。だから濃度や密度、魔力が多くなれば赤く見える。ってそんな事より早く行け！」
シグナム「だが！」
レイ「ガァァァ」
レイはアイザーとフェイトを見る。
シグナム「くそっ【意識がないのか！？】」
シグナム「レヴァンティン、カートリッジロード」
レヴァン〔Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ〕
ーガシャン
ボワッ！
シグナム「紫電一」
シュッ
視界からレイが消える。
シグナム「な」
ガシッ
ズガンッ
頭をわし掴みされ地面に叩きつけられる。
シグナム「くっ、【意識がないとはいえ：油断した。こいつは何者だ？】」
レイはフェイトの前に立ち、右手に炎を纏い構える。
アイザー「【くそっ、プログラムの準備は出来てるってのに！】レイ！レイ！少しでいいから正気に」
レイ「グアァァ！」

アイザー【ダメか…】
??〔能力暴走を確認。意識レベルの低下、確認。安全装置(セレフティシステム)を起動します。〕
カシャン
レイの足下に魔法陣が展開される。
ズンッ
レイ「グガッ」
ガクン
レイはひざを着く。
アイザー「これは…重力魔法。」
それでも、アイザーやフェイトに一撃見舞おうともがき続ける。
レイ「ぐ、グア、グアァ」
アイザー「止めろ…やめろぉぉ！レイぃ！」
フェイト「レ…い？」
フェイトの声がした。
アイザー「フェイト、気が付いたのか?!」
フェイト「…」
また気を失ったようだ。
アイザー「くそっ」
レイ「ぐっ…ふぇい…」
アイザー「!!レイ!」
レイ「じゅん、備は…いいか?」
アイザー「ああ!」

レイ・アイザー「「ユニゾン・イン」」

バチバチッ
レイ「ぐっ、」

アイザー「レイ、もうちょっとだ！…プログラムチェック完了。鎮静プログラムを起動する！」

15話　一力の片鱗<2>一（後書き）

新しく出てきた技の解説を、
焔拳（えんけん）　衝破（しょうは）
炎を纏った拳で殴る。
『衝破』とは足先から練り上げた力を踏み込みの直後拳に乗せ、打ち出すと同時に魔力を打ち込む技法。
技名はありませんが、打撃と同時に遠隔発火魔法を打ち込んでおくということも行っていました。

読んで下さりありがとうございます。
意見や感想をいただけると嬉しいです！
テストが終わったのでなるべく早く投稿出来るよう頑張ります！

１６話　―出会いは偶然<１>―（前書き）

突然ですがアンケートを実施します！
A'ｓ編終了後、レイが中学卒業までの間どこの家で暮らすかアンケートをとります。

?このままハラオウン家
?高町家
?八神家
?一年交代で三軒全部回る
?その他（　）

因みにどれを選んでも話しの大筋は変わりません。
アンケートに応えて下さる方が居なかった場合は作者が勝手に決めます。
ご協力お願いします。

16話　―出会いは偶然<1>―

―アースラ―

目が覚めると見知らぬ天井があった。
フェイト「…ここは…？」
なのは「！！気が付いた？フェイトちゃん！」
フェイト「なのは？えぇとどうなって…？」
なのは「ここはアースラの医務室だよ。シグナムさんと戦っている途中に仮面の人に…」
フェイト【そうだ…リンカーコアを】
なのは「でもリンカーコアはちゃんと戻してあって、多分レイちゃんが」
フェイト「そうだ！レイは！？」
なのは「フェイトちゃん、なにがあったか知ってるの！？」
フェイト「いや…リンカーコアを取られた後アイザーの声で意識が一度戻ったけど、またすぐ気を失って…」
なのは「そっか…」
フェイト「何があったの？」
なのは「それが…よく分からないの。」
フェイト「え？」

ビーン
アルフ「あ、フェイト！」
リンディ「もう平気なのかしら？」
フェイト「はい。それより…」

リンディ「そうね、フェイトさんも無事だし、エイミィ状況を」
エイミィ「はい、まず今回、なのはちゃん達の世界に置いていた対策本部のシステムが全てダウンしました。」
フェイト「本当？」
リンディ「あそこの機材、プロテクトは、アースラと同じなはずでしょ？」
エイミィ「はい。しかし、一発でシステムがダウンしました。…すいません私の責任です…。」
リンディ「そんなことはないわ！…それでレイさんに何があったか分からないのね。」
エイミィ「はい。本局での治療も拒否されましたし…」
フェイト「あの、レイは今何処に？」
クロノ「部屋で休んでいる。気絶したままだ目を覚ましていない。」

リンディ「ところで復旧状態は？」
エイミィ「１００％復旧しましたがプロテクトをより固くしないと」
リンディ「アレックス、アースラの準備は？」
アレックス「全て完了してます。」
リンディ「なら、本部をアースラに移します。」
全員「はい。」

―八神家―
ヴィータ「なんなんだ？あの仮面の奴」
ザフィーラ「少なくとも味方ではないだろうな。」
シグナム「ああ。」
ヴィータ「あのレイって奴もよく分からねぇ。何でそんな事知って

んだ？おかしいだろ！」
シグナム「そうだな。」
ザフィーラ「闇の書のことは我らが一番知っている。」
シグナム「…そうだな。」
ザフィーラ「何か気になる事でもあるのか？シグナム。」
シグナム「レイの事だが…」
ヴィータ「何だよ、シグナム。」
シグナム「目がな…」
ヴィータ「目？」
シグナム「あれは絶望して人を殺した奴の目だ。」
ヴィータ「…そうか。」
シグナム「あと…夜天の書と言う言葉に聞き覚えはあるか？」
ヴィータ「…いやねぇな」
ザフィーラ「ああ、知らん。」
シグナム「そうか。」
シャマル《みんな大変！！はやてちゃんが！！》

―図書館にいるはやて―
シャマル「あ、はやてちゃん、迎えにきました。」
はやて「あ、シャマル！すずかちゃんありがとな、此処まででええよ。」
すずか「うん、じゃあはやてちゃんまたメールするね。」
はやて「うん、またな。」

はやて「グレアムおじさんに手紙出してくれた？」
シャマル「はい。」
はやて「ありがとな。」

はやて「～♪」
シャマル「はやてちゃん今日はご機嫌ですね。」
はやて「あんな、新しい友達が出来たんよ！
でな、すずかちゃんに話したら、すずかちゃんの友達だったんや！
で、電話番号教えて貰ったんよ！」
シャマル「良かったですね！はやてちゃん。」
はやて「……なあシャマル、笑わずに聞いてくれる？」
シャマル「？はい。何ですか？」
はやて「あの子と話しとるとな、思うんよ…懐かしいなぁ…て。なんでやろ？」
シャマル「懐かしい？どこかで会ったことがあるんですか？」
はやて「それが覚えとらんのや。一度あったら忘れそうに無い子何やけど…」
シャマル「へえ、どんな子なんですか？」
はやて「声が低めでな」
シャマル「はい」
はやて「喋り方が安定せんでな」
シャマル「はい」
はやて「ぶっきらぼうやけど優しいんや。落ちてくる本から助けてくれたんよ。」
シャマル「男の子なんですか？」
はやて「女の子やよ。」
シャマル「話だけ聞いてると男の子みたいですね。」
はやて「ははは。あ、あとな」
――黒い眼帯をしとるんや――
シャマル「……え？」
はやて「だからな一回見たら忘れんと思うんや。」
シャマル【黒い眼帯の女の子って…】
はやて「シャマル？」
シャマル「は、はいそうですね。」

はやて「変なシャマル。」
シャマル「それより早くお買い物して帰りましょ。みんなお腹を空かして待ってますし。」
はやて「……っ、」
シャマル「……？はやてちゃん？」
グラッ
シャマル「！！はやてちゃん！！」
突然はやてが胸を押さえて苦しみだした。
はやて「うぅっ、」
シャマル《みんな大変！！はやてちゃんが！！》

１６話　―出会いは偶然<１>―（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
どうだったでしょうか？
意見や感想をいただけると嬉しいです。
出来ればアンケートに応えて下さい。お願いします！
次回ははやてのお見舞いの予定です。

１７話　ー出会いは偶然<２>ー（前書き）

遅くなりました！そして中途半端なところで切れます。ごめんなさい。
本文の前にミコトの人間形態？私服バージョンを載せました。見て下さい！

17話　ー出会いは偶然<2>ー

＞i27104ー2788＜

ー元対策本部（ハラオウン家）ー

ガチャ
リンディ「レイさんの様子はどうかしら？」
アイザー「相変わらずまだ寝てる。」
リンディ「そう…」
アイザー「アースラに居なくていいのか？」
リンディ「ええ、クロノとエイミィに任せてきたわ。」
アイザーは内心、艦長不在でいいのかよと突っ込んだ。
コンコン
ガチャ
アイザー「？どうしたんだ？なのは、フェイト。」
フェイト「これ…」
フェイトの手には一つの箱が。
なのは「出来れば今日中に渡したかったの。」
ミコト「まだ目を覚ましてないし渡すのは無理そうだね。」
あれから3時間経っている。
アイザー「そうだな、もう遅いし色々聞きたかったかもしれんがなのはは帰った方が」
レイ「…っ、……ここは？」
なんてタイミング良く目を覚ますんだ？とアイザーが内心突っ込んだ事を記しておく。
ミコト「姉さん！」
フェイト「よかった…気がついて。」

なのは「ここはレイちゃんの部屋だよ。」
レイ「そうか」
フェイト「何があったの？レイ。」
リンディ「フェイトさん、今日はもう遅いし、後日聞きましょ？」
フェイト「……はい。」
アイザー「何か渡すモン在るんじゃなかったのか？」
なのは「フェイトちゃん！」
フェイト「うん。…はいこれ」
フェイトは箱を手渡す。
レイは箱から取り出すと中の物をしっかり握り、形を確かめる。
レイ「……携帯電話か？」
なのは「そう、色は私が選んだんだ。機種はフェイトちゃんと一緒。」
レイ「だが…」
リンディ「お金のことは気にしなくていいのよ？」
レイ「…」
フェイト「これならレイが何処か行っても連絡とれるし。」
レイ「はあ、わかった。持っとくよ、ありがとな。」
なのは「良かったね！フェイトちゃん。」
フェイト「うん、なのは！」
リンディ「それじゃあなのはさん家まで送るわ」
アイザー「ちょっと待ってくれ。」
ミコト「…どうしたの？アイザー。」
アイザー「レイ」
レイ「何だ」
アイザー「お前の持ってる携帯は何色だ？」
レイとアイザーを除いた４人は質問の意味が分からない。
なのは　「え？」

フェイト「そんなの見れば解るよね？」
因みに色は深い緑色。
リンディ「…まさか」
アイザー「……見えてないよな？レイ」
レイ「……」

レイは沈黙する。
つまりそれは肯定で。

ミコト「そんな…」
目が見えないことがバレてしまった。

ーその頃アースラー

さっきの戦闘のデータを整理していると、
ロッテ「クロスケ、手伝いに来たよ」
アリア「ごめん、予定が思ったより長引いちゃって」
グレアム提督の使い魔、ロッテとアリアが手伝いに来た。
クロノ「いや、手伝いに来てくれただけでありがたいよ。」
しかし見るとロッテはケガをしているようだ
クロノ「ロッテ、大丈夫か？」
ロッテ「綺麗に繋がったしこれぐらい平気だって」
相手がきれいにスパッと斬ってくれたからね。と付け加える。
ロッテ「それにかわいい愛弟子の頼みとあったらね」
アリア「で、何見てるの？」
クロノ「さっきの戦闘のデータを」
アリア「闇の書の？」
クロノ「それもだが、今回はイレギュラーがいてね」

ロッテ「イレギュラー？」
クロノ「エイミィ、映像出してくれ」
エイミィ「了解」
エイミィが映像をだしてくれた。
エイミィ「仮面の男は、なのはちゃんの砲撃をカードした後、バインドで拘束して、その後わずか８分でフェイトちゃんのいた世界に移動。で、気付かれずにブスっと」
クロノ「なのはの砲撃を防御、フェイトに気配を感じられずにブスっと、こんなことができるのは、ロッテとアリアを足したような存在か？」
アリア「確かに私は近接戦苦手だし」
ロッテ「私はそこまで魔力防御高くはないし」
エイミィ「やっぱりしぶといよね、この仮面の男」
クロノ「まったくだ。ともかく、仮面の男のロッテ並の格闘戦、アリア並の魔法、厄介だ。」
その時
ピピピピ
エイミィ「あ、ユーノ君からの通信だよ」
クロノ「繋げてくれ」
ユーノ「クロノか、とりあえず、報告する事がある。」
クロノ「闇の書について何か分かったのか？」
ユーノ「うん、まず闇の書は正式名じゃなく、本当の名を夜天の魔導書という、各地の偉大な魔導師を研究するために作られた主と旅する魔導書らしい。破壊をしだしたのは、過去の主がプログラム改造してからのようなんだ。」
エイミィ【レイちゃんの言ってたこと本当だったんだ。】
アリア「どこの時代にも、力を求める人はいるとゆうわけね」
クロノ「無限再生は、そのためか？」
ユーノ「多分」
クロノ「で、封印方法は分かったのか？」

ユーノ「それはまだ調べ中」
クロノ「そうか、なら引き続き調べてほしいのだが」
ユーノ「分かった、調べとくよ。」
通信を終了した。
ロッテ「ユーノって子すごいね。」
アリア「無限書庫で1人で探しているなんて」
クロノ「あいつはスクライアだからね調べるのは本業さ。」

ー病院ー

〈シグナムｓｉｄｅ〉

すぐさま私達は救急車を呼び主はやてを病院へ連れていったのだが
はやて「みんな大げさや、めまいと腕と胸をつっただけやって」
主はやてはそう言って私達に心配をかけまいとしていた。
石田医師「無事でよかったわ、検査とかしたいからもうちょっとゆっくりしてね。」
はやて「はーい。」

石田「それから、シグナムさん、シャマルさんちょっと」
私達は石田先生によばれた。
石田「検査では何も出てませんがつっただけはないと思います。」
シグナム「やはり麻痺が拡がってるのでしょうか？」
石田「おそらく」
「何時発作がおこるか分からないので入院をしてほしいんですけど」
シグナム「お願いします。」
入院をする事を主はやてに伝えると
はやて「入院か」

石田「検査とか色々やりたいしね。」
シグナム「主はやて、石田先生もそうおっしゃってますし」
はやて「でも、私が入院したら誰がみんなのご飯作る？」
シャマル「私達に任せて、はやてちゃん。」
はやて「心配やなぁ。」
シャマル「大丈夫です！」
はやて「すずかちゃんからのメールどないしよう」
シャマル「私が返信しておきますから」
はやて「なら、休暇を少し貰うわ。あ、公衆電話でええから少し電話させてくれませんか？」
石田「構わないけど、時間も遅いし手短にね。」
はやて「はーい」
シグナム「主はやて、ゆっくり休んでください」
ヴィータ「毎日、お見舞いに来るよ」
はやて「毎日じゃなくてもええよ、ヴィータ。」

〈シグナムｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

―レイの部屋―

取り敢えず詳しい話は後日と言うことになり、なのはとフェイトは納得がいかないながらも部屋を後にした。

アイザー「レイ、これから外出のときはアタシかミコトが付いてくからな。」
レイ「ああ、黙ってて悪かった。」
ミコト「姉さん…」
アイザー・ミコト【【こりゃあ（これは）反省してねぇな（ないよ）

…】】
ピリリリ、ピリリリ
レイ「ん？」
アイザー「さっき貰った携帯じゃないか？」
レイ「そうだな」
ゴソッ
ピッ
レイ「もしもし」
はやて「もしもし、レイちゃん？」
レイ「…はやてか？」
はやて「そうや」
レイ「何で電話番号知ってんだ？」
はやて「すずかちゃんに聞いたんよ。」
レイ「そうなのか、【知り合いだったんだな。】で、どうしたんだ？」
はやて「入院する事になってな、図書館にいけんから言っとこうと思ったんよ。」
レイ「なら見舞いにいく。」
はやて「ほんまに？ありがとうな。」
レイ「あ、済まない。はやて」
はやて「どうしんたんや？」
レイ「黙ってくれてたのに失明したのばれてしまった。」
はやて「…ばれたならしゃあないやろ。【んな大変なこと本気でばれんと思っとったんか…】」
レイ「もう時間が遅いな、じゃ切るぞ。」
はやて「お休みなレイちゃん。」
レイ「ああ、お休みはやて。」

―次の日―

―学校―

アリサ「ねぇフェイト、レイは？」
フェイト「今日もどっか行っちゃった。」
すずか「また？」
フェイト「うん。」
なのは「ならフェイトちゃん、あれ使ってみたらどうかな？」
アリサ「あれ？」
なのは「レイちゃんに携帯電話渡したの。ＧＰＳ付きの。」
フェイト「あ、【そうだった】使ってみる。」

しかし……

フェイト「……」
すずか「どうかな？フェイトちゃん。」
なのは「何処にいるか分かった？」
アリサ「どうしたのよ？黙っちゃって。」
フェイト「…電源」
アリサ「え？」
フェイト「電源切ってるよ…レイ」

アリサ「レイってバカ？バカなのね！」
すずか「まあまあ落ち着いて、アリサちゃん。」
なのは《話題変えた方がいいよね。》
フェイト《うん、そう思う。》
なのは「う～ん、あ、そうだ。すずかちゃん、この前話してたはやてちゃんに今度会わせてよ！」
フェイト「私も会ってみたいな。」

すずか「それがね、はやてちゃん入院しちゃったんだって。」

―その頃レイ―

ミコト「姉さんどこ行くの？」
レイ「病院。見舞いに行く。」
ミコト「【誰のお見舞いだろ？】ボクも着いていくよ？」
レイ「ああ、動物は入れないから準備しろ。」
ミコトは急いで１１、１２歳位の子供の姿になる。
ミコト「はは、この姿久し振りだね！」
レイは手に持っていた帽子を被せる。
レイ「耳と尻尾は隠しとけ。…行くぞ。」
ミコト「あ、待ってよ姉さん！」

〈はやてｓｉｄｅ〉

―ペラッ
…絵本？
ここは…図書館？
…？小さい頃の…私？
明晰夢ってやつかいな？
？？「あっ、その絵本！一緒に読んでもいい？」
そこにやって来たのは長い茶髪の女の子。
はやて「え？ええよ。」
？？「ありがとう！あ、名前なんて言うの？私の名前は―…」
場面が変わる。

はやて「今日も来るかな？」
？？「はーやて！」
ニコニコ笑いながらこちらにやってくる。
はやて「あ、…ちゃん！」
名前が聞こえへん。私が覚えてないからやろか？
また場面が変わる。
？？「ごめんね…はやて。」
私は泣いていた。
はやて「また、会える？」
？？「うん！図書館に会いに行くから！…だから泣かないで。」
はやて「分かった次会うまで泣かん！グズっ、待っとるからな…ちゃん！」
？？「うん！約束、ゆーびきーりげーんまーん…」

気付いたら真っ暗な世界に立っていて、目の前にはあの女の子。
はやては思わず聞いた。
はやて「…なあ、名前教えてくれんか？…思い出したいんよ。」
フルフル
女の子は首を横に振る。
はやて「…なんでや？」
女の子は答えず、ただ…悲しげに微笑むだけだった。

そこではやては目覚める。
【あの子の目…悲しそうやった…でもそれと同じくらい…諦めの色があった…何を諦めたんや？……それにあの目、どこかで見たような…気のせいやろか？】

〈はやてside　out〉

コンコン
ガラガラ
入ってきたのはレイとミコト。
レイ「よう、はやて」
ミコト「はじめまして」
はやて「レイちゃん！来てくれたんやね、ありがとうな。…そっちの子は誰なん？」
ミコト「ボクはミコト！姉さんの弟分！君は？姉さんの友達？」

はやて「そうやよ、八神はやてや、よろしくな。」
ミコト「うん！よろしく。あ、花瓶あるね、花持ってきたんだ。さしていい？」
はやて「ええよ。」
レイ「体の調子はいいのか？」
はやて「大丈夫や、レイちゃんこそどうなん？」
レイ「…まあ動けるし大丈夫だろ。」
はやて「基準そかいな！」
レイ「？」

ガラガラ
ヴィータ「はやてー！」
シグナム「主、着替えを…」
ミコト「…え？」
ヴィータ「…なんで」
レイ《話を合わせろ》
ヴィータ《は？》
レイ《この様子だとはやては何も知らないんだろ？》
シグナム《…そうだな》
ヴィータ《ちっ、》
レイ「ミコトの知り合いか？」

ミコト「う、うん。散歩してたらよく会うんだ。」
はやて「そうなん？」
シグナム「はい、私はヴィータを迎えに行ったとき何度か。」
ヴィータ「そうなんだよ！はやて！」
レイ【ちょっと苦しかったか？】
はやて「だから最近ヴィータお出かけが多かったんやな。」
レイ「【納得してくれたか。】はやて、悪いが急用があるんでな、また来る。」
はやて「そかまたな、レイちゃん、ミコト君。」
レイ「ああ、またな。」
ミコト「またね、はやて！」
レイ《…話があるなら屋上に来い。》
シグナム《すぐに行く》
ヴィータ《逃げんなよ！》

１７話　ー出会いは偶然&１ｔ；２&ｇｔ；ー（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
どうでしたか？意見や感想をいただけると嬉しいです。

突然ですが現在レイのその後アンケートを実施しています！
Ａ'ｓ編終了後、レイが中学卒業までの間どこの家で暮らすかのアンケートです。

このままハラオウン家
？高町家
？八神家
？一年交代で三軒全部回る
？その他（　）

因みにどれを選んでも話しの大筋は変わりません。番外編の内容が変わります。
アンケートに答えていただけるとすごく助かります。現在一名答えて下さっています。
アンケートは２０話の投稿をもって終了の予定です。
ご協力お願いします。

18話　ークリスマスー

ーガチャン
シグナム「待たせたな」
レイ「こんな早くまた会うとは思わなかったよ。」
シグナム「ああ、私もだ。」

ヴィータ「うあぁーー！」
いきなりヴィータが打ちかかってくる。
バシン
それを武装したミコトが受け止め、投げる。
ザサァ
ミコト「君、死んどく？」
レイ「武装を解け、ミコト。敵じゃない」
ミコト「姉さん、でも」
レイ「解け、と言ってるんだ。」
ギロッ
ミコト「わ、解った。」

シグナムは今にも飛びかかりそうなヴィータを肩を掴んで止めていた。

ヴィータ「離せよシグナム！もう少しなんだ！今邪魔される訳にはいかねーだろ！」
シグナム「落ち着けヴィータ、まだ邪魔されると決まったわけでは無いだろう？」
ヴィータ「何言ってんだよシグナム！」

レイ「邪魔なんてしねーよ。安心しろ」
ヴィータ「んだと？散々邪魔して今更信用できるかよ！」
レイ「オレは自分から手を出したことはないぞ、いつもおまえ達が先だ。」
シグナム「そう言えば、おまえが戦うときはそうだな。」
ヴィータ「てめぇの目的は何だ？」
レイ「闇の書を元の姿である夜天の書に戻すこと。はやても助かる」
ヴィータ「んだと！？闇の書が壊れてるってのか！」
シグナム「それが本当だとしておまえは何故主を助けようとする？」
レイ「友達だから、じゃダメか？」
シグナム「…【どうすべきか】」
ヴィータ「お前は管理局の人間じゃねーのか？」
レイ「違う」
ミコト「それは無いね」
シグナム「何故？」
ミコト「彼奴等は殺したんだよ、ボク達の大切な人を」
レイ「オレはそれにブチ切れてな皆ごｒ」
シグナム「何となく解った、済まない。」

レイ「んー、じゃオレらはおまえ等の邪魔を一切しない、信じられないならおまえ等に着いてくから一日中見張っててもいい、でどうだ？オレははやての見舞い以外特に何もしない。」
シグナム「お前は闇の書を直したいのだろう？それで良いのか？」
レイ「直すとしたら闇の書を完成させて一度暴走させ、はやてに管理者権限を戻さなくてはいけない。」
ヴィータ「暴走？」
シグナム「なるほど、壊れていないと言う我々の主張が正しければお前のすることはない。壊れているとしても闇の書が完成するまではやることもないと。」
レイ「そうだ」

ヴィータ「信じるのかよ！シグナム！」
シグナム「闇の書の主がばれた以上手元に居て貰わないと危険だ」
ヴィータ「そうだけどよ」
シグナム「ヴィータ」
ヴィータ「分かったよ！」
こうしてオレは暫く八神家でミコトと一緒に世話になることになった。

―ハラオウン家―

フェイト「アイザー、レイは何処に行ったの？」
なのは「それに説明してくれるんじゃ」
アイザー「あのな、おまえ等…レイは後日説明するとは言ったが明日説明するとは言って無かったろ…」
なのは「あ…」
アイザー「心配するな、アタシを通せば連絡は付くし、はやてって奴の見舞いを良くしてるらしいから運が良けりゃ逢えるだろ。」

シャマル「すずかちゃんがあの白い子達を連れてお見舞いに…」
―病院―
はやて「レイちゃん、さっきすずかちゃんがお友達と一緒に来てな、レイちゃんに会いたがっとったよ。」
レイ「今はちょっと会うわけには行かないんだ。」
はやて「そんな困った顔せんといて、あんまり心配させたらいかんよ」
レイ「ああ」

―八神家―

トントントン
ミコト「あーシャマル！鍋ふきこぼれてるから！」

ミコト「シャマル！姉さんが言ったように作るだけだよ？何ですいか入れようとするの！カレーだよ！」
レイ「オレの目が見えれば…」

レイ「…何とかできたようだな」
シャマル・ミコト「どう？」
シグナム「ああ、美味しい」
ザフィーラ「大丈夫だ」
ヴィータ「レイ、ミコトありがとな、久々にまともなもん食ったぜ…」

主にオレはシャマルと八神家で待機（その間ミコトと家事をやっていた）とはやての見舞いを繰り返す日々を暫く続けた。

ボルケンリッターにも多少警戒されているがある程度打ち解けたと思う。

ヴィータ「早くはやての所行こーぜ！レイも行くだろ？」
レイ「ああ」
シグナム「…」
シャマル「シグナム？」
シグナム「ああ、いや…ただレイとヴィータ、仲良くなった…と思ってな…」

シャマル「ヴィータちゃん面倒見良いからどこか抜けてるレイちゃんのことほっとけないのね。」
シグナム「それになんて言うか…敵という感じがしないな。」
ミコト「そりゃそうだよ。」
シグナム「ミコト？」
ミコト「はやてを姉さんは命賭けてでもで助けたいみたいだから」
シグナム・シャマル「「！？」」
シグナム「どういう意味ｄ
ヴィータ「おーい！早く！」
ミコト「あ、はーい」

レイ「…もうクリスマスイブか…」

１８話　ークリスマスー（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
どうでしたか？意見や感想をいただけると嬉しいです。
突然ですが現在レイのその後アンケートを実施しています！
Ａ'ｓ編終了後、レイが中学卒業までの間どこの家で暮らすかのアンケートです。

？このままハラオウン家
？高町家
？八神家
？一年交代で三軒全部回る
？その他（　）

因みにどれを選んでも話しの大筋は変わりません。番外編（と言うか日常編）の内容が変わります。
アンケートに答えていただけるとすごく助かります。現在一名答えて下さっています。
アンケートは２０話の投稿をもって終了の予定です。
ご協力お願いします。

１９話　ーぶつかり合う心ー（前書き）

本日二度目の投稿です。
そして次話の投稿をもってアンケートを終了します。詳しくは後書きに書きますが、ご協力お願いします。
では本文をお楽しみ下さい。

１９話　ーぶつかり合う心ー

ガラガラ
ヴィータ「はやてー！」
はやて「今日も来てくれたんや、ありがとな。」
シャマル「はやてちゃん、着替えはここに置いておきますね。」
はやて「ありがとなシャマル。」
コンコン
ガラガラ
すずか・アリサ・フェイト・なのは「「「「こんにちは」」」」
ヴィータ「！！」
シグナム「なっ、」
フェイト「えっ」
はやて「どうしたんや？」
レイ《はやては何も知らない、口裏を合わせてくれ》
なのは「わ、わかった」
フェイト「う、うん」

〈なのは・フェイトｓｉｄｅ〉
はやてちゃんにサプライズしようと思って行ってみると、闇の書の守護騎士の人達がいました。
レイはシグナム達と一緒にいる…どうなってるの？

ーその後、病院の屋上ー
〈なのはＳｉｄｅ〉

なのは「はやてちゃんが闇の書の主」
シグナム「我々の願いは後もう少しで達成できるのだ」

シャマル「邪魔をするなら、はやてちゃんの友達でも」
なのは「でも闇の書は完成させたら」
ヴィータ「うおぉー！」
ヴィータちゃんが突っ込んできた
バシィィイ
なのは「ヴィータちゃん」
ヴィータ「あとちょっとなんだ！あとちょっとではやてを助けられるんだ、邪魔するな！」
その瞬間、ヴィータのデバイスから炎がでた

〈ヴィータＳｉｄｅ〉

炎で焼き払った
しかし、あいつは、炎の中から出てきた。
その姿を見たままの感想を言ってやった
ヴィータ「悪魔め」
なのは「悪魔でもいいよ、悪魔なりのやり方で…話を聞いてもらうから！！！」

〈フェイトＳｉｄｅ〉

フェイト「シグナム、闇の書は過去の主によってプログラムを改造されているの」
シグナム「ああレイに聞いた。しかし私達はある意味闇の書の一部だ」
ヴィータ「だから闇の書を一番知ってるんだ」
なのは「じゃあなぜ本当の名前で呼ばないの」
ヴィータ「レイも言ってたな似たようなこと」
フェイト「闇の書はその破壊活動から、つけられたでも破壊活動する前には違う名前だった」

なのは「あなた達が本当に闇の書を理解してるなら」
フェイト「闇の書の本当の名前を知ってるはずです」
シグナム「名前などどうでもいい、主はやてを救うためなら、騎士の誇りも捨てると決めた」
「私達は止まれんのだ」
フェイト「私が止めます」

―その頃はやてとレイ―
はやて「レイちゃん何かみんな様子が変だったけど何かあったん？」
レイ「みんな戦ってんだ、思いを貫くために」

はやて「何言っとるん？」
レイ「はやて、私は戦うよ…はやてを助ける。」
はやて「レイちゃ」
レイ「はやての大切な人達も守る」
はやて「レイちゃん！」
レイははやての目を見て笑う
レイ「だからはやて、はやても戦って、…信じて、家族を友達をね…必ず助けてみせるから」
はやて【そうか…あの女の子の目…レイちゃんに似とったんやな】
はやて「何のことかよう分からんけど…」
レイ「それで良いよ」
そう言ってまた笑う
はやて「そんな目せんといて」
レイ「？」
はやて「何でそんな目をするん？悲しそうで、苦しそうで…何かを諦めた…そんな目をしとるよ。だからなレイちゃん、笑っとっても悲しそうや苦しそうや。」
レイ「大丈夫だ」
はやて「レイちゃん…」

ミコト《姉さん！仮面の奴らが！》
レイ「ちょっと行ってくる。…大丈夫だみんなを守ってくる。」
はやて「…レイちゃん…」
レイ「行ってくるぜ、はやて」

なのは「何、これ」
突然みんなにバインドが掛かっていた
仮面1「捕らえたぞ」
仮面の男が来た
仮面2「遅かったな」
男1「準備に手間取った」
仮面の男の人が2人
シグナム「貴様達はなんなんだ！」
仮面1「プログラム風情に知る権利はない」
そうゆうと、仮面の男の人の手には夜天の魔導書があった
シャマル「それは！」
男2「闇の書の最後のページはお前達が埋めるのだ」
仮面の男はシャマルを見る
仮面1「まずはお前だ…奪え」
闇の書〔蒐集〕
夜天の魔導書から光が伸びて、シャマルのリンカーコアから魔力を奪っていく…ハズだった

レイ「ぐは…」
シャマル「きゃぁ」
ガシン…ドサ
ミコト「姉さん！」
ザフィーラ「シャマル！」

仮面1「何だと！」
いつの間にか現れたレイがシャマルを突き飛ばし代わりに蒐集されていた。
…シャマルは壁にぶつかり気絶してしまった。
ちなみにミコトとザフィーラは声を出したのでバレてしまったが、さっきまで仮面の男に気づかれておらずバインドにかかっていなかったが今にも飛びかかって行きそうなザフィーラをミコトが羽交い締めにして止めていたのだ。

理由は簡単プログラムであるボルケンリッターはリンカーコアを失うと存在を保てないからだ。レイがシャマルを庇ったのもそのためだ。

ヴィータ「なんだよ…どうなってんだ！」
シグナム「…どうなっている？」
仮面の男2「貴様…一体何者だ？」
目の前で起こっている理解不能の事態にミコトを除く全員が凍り付いていた。
本来蒐集は一人一回のはずが彼女は二回目。理由は簡単。　彼女の左目にもう一つリンカーコアが在ったからだ。
それだけでも異常なのにあっと言う間に残りのページが埋まっていくのだ。いくら後少しとはいえ一人の人間に埋められるページ数ではなかった。残り一ページというところで蒐集を止める。
仮面1「…まあいい、手間が省けた」
そう言うとなのはとフェイトを閉じ込め自分たちの姿を二人に変える
そしてレイの頭を掴む

辺りが白く光り
そこにはやてが現れた。

〈はやてｓｉｄｅ〉

レイちゃんが行ってしまってから少しして
ドクン
また胸が痛くなって
気が付いたら屋上におった。

今にも飛びかかりそうなザフィーラをミコト君が　羽交い締めにして止めていて、シャマルが壁に激突して気絶しとって、シグナムとヴィータが縛られとって…

レイちゃんがフェイトちゃんに頭掴まれて持ち上げられとる。
みんなボロボロや

なのは「はやてちゃん、君は病気なんだよ」
フェイト「闇の書の呪いとゆうね」
なのは「例え完成しても治らない病気なんだ」
フェイト「だけどこの子達は完成させようとしたんだよ」
はやて「…なんでボロボロなん」
なのは「悪い事をしたからお仕置きをね」
レイ「騙されるな…この二人は偽物だ…」
はやて「え？」
ズガン
…ドサッ
はやて「レイちゃん！」
偽なのは「まだ喋る元気があったんだね。」
グラッ

レイ「闇の書を直す…はやてを助けるまで死ぬ気はないよ。」
偽フェイト「まだ言って」
レイ「直せると言っているんだ！壊す必要も、封印する必要もない！誰も死なずに済むんだ！」
偽フェイト「今更…ふざけるなあアァ！！」
偽なのは「！落ち着ｋ」
バシュッ
作り出されたのは氷のトゲ。一直線に飛んでくる
レイと偽フェイトの間にははやてがいた
はやて「きゃあぁ」
アルト〔Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　ａｃｃｅｌ〕
シュッ
ーグサァ

はやてが気づいたときにはすでに突き飛ばされた後だった。（ちなみにシャマルの時のように壁に激突して気絶するなんて事はなかった。）

防ごうにも間に合わないと判断してのことだった

レイは速度を重視しているため防御は薄く紙装甲だ。

おまけに偽フェイトは頭に血が上って非殺傷設定にしてなっていなかった。

その結果

見事レイの腹に突き刺さり

…レイは血を流しながら倒れた。

はやて「……レイ、ちゃん？」
レイ「……だい、じょ、ぶ、ゴホッ…カハ」
血を吐く
シグナム「レイ！」
ヴィータ「嘘だろ…」
ミコト「姉さん！」
はやて「嘘や」

偽なのは「…」
ヴィータ「うああ」
残り一ページになっていた闇の書が完成し

ザフィーラ「大丈夫か！ヴィータ」
ヴィータ「はあ、はぁ、一ページ分くらい何ともねぇ、それより」

はやて「嘘や、こんなん：悪い、夢やあぁ！」

その叫びに答えるように

黒く禍々しい

爆発的な光と魔力の奔流が溢れ出し

はやてを包み込んだ

１９話　ーぶつかり合う心ー（後書き）

読んで下さりありがとうございます。
どうでしたか？意見や感想をいただけると嬉しいです。

前書きでも書きましたが現在レイのその後アンケートを実施していますが次の投稿をもって終了します。
アンケート内容はＡ－ｓ編終了後、レイが中学卒業までの間どこの家で暮らすかです。

？このままハラオウン家
？高町家
？八神家
？一年交代で三軒全部回る
？その他（　）

因みにどれを選んでも話しの大筋は変わりません。番外編（と言うか日常編）の内容が変わります。

現在一名の方がこたえてくださっています。
ご協力お願いします。

２０話　ーぶつかり合う想いー（前書き）

遅くなりました。ごめんなさい。
いつもより長めです
それとアンケートを終了します。ご協力ありがとうございました。

２０話　ーぶつかり合う想いー

はやてから光が溢れる。
その光が普通の光だったら、それはまるで天使の様であっただろう。
しかしはやての身から出る光は黒く、禍々しい光だった。

偽なのは「それじゃあ」
偽フェイト「頑張ってね」
なのはとフェイトの偽物がどこかへ行くが今はそれどころではない。
なのは「レイちゃん！はやてちゃん！」
フェイト「レイは！」
なのはとフェイトが戻ってきた。
シグナム「夜天の魔導書が完成した」
ザフィーラ「それよりこのままではレイは死ぬぞ」
ヴィータ「シャマルなら」
シグナム「気絶している」
ヴィータ「くそっ！」
ミコト「大丈夫…シグナム驚かないでね。」
シグナム「何？」
レイ「…り…ンク」
？？〔Ｙｅｓマイロード。セカンドコア封印解除〕
三角形のベルカ式魔法陣が現れその上に逆三角形の魔法陣…二つ目のベルカ式魔法陣が現れる。

フェイト「魔法陣が…二つ？」
ヴィータ「どうなってやがんだ！？」
視界を白く染める程の強い光を放ち…光が収まると
シグナム「！」
地面に着くほどに長い銀髪、

ヴィータ「な…」
ザフィーラ「…」
白銀の瞳（勿論左目は眼帯）の
なのは「…え？」
フェイト「え…ぇ？」
レイが悠然と立っていた。

ミコト「姉さん…」
？？〔リンク完了しました。〕
レイ「大丈夫だ。」
ヴィータ「おい、どうなってんだ！」
レイ「それよりはやてを助けるのが先だ。…シグナム、暴走してる訳じゃないから安心しろ。」
シグナム「そうか」
暴走状態の時と良く似た姿に警戒していたシグナムは警戒を解く。

はやて「闇の書の完成を確認、管制プログラムを発動」
はやては不可解な言葉を言うと、…一姿が変わった。
銀髪の女の人に

女の人「またこうなってしまった、…これが運命なのか？」
なのは「あなたは誰ですか？」
女の人「私はお前達が闇の書と呼んでいた魔導書の管制プログラム」
シグナム「やめないか？」
管制「シグナム、お前は守護騎士だろう？主は望んでいる、皆が傷つき…彼女が死ぬ世界は夢であってほしいと。…だから私は主の願いを叶える」

そうゆうと、女の人の手に黒い魔力が集まってくる。
ヴィータ「まずい！！」
管制「遠き地にて、闇に沈め『ディアボリックエミッション』」

闇の書の管制の女の人を中心に広がる闇。
守護騎士達のおかげで防御が間にあった。
さらに、闇の書の管制の女の人は結界を張った。
レイ《とりあえず隠れるぞ》
フェイト《わかった》
レイや騎士達はビルの影に隠れた。

なのは「シグナムさん、あの人は誰ですか？」
シグナム「あれは闇の書の管制者、我々のような闇の書のただのプログラムと違い、彼女が闇の書だと言ってもいい」
フェイト「なぜ、私達に攻撃を？」
ヴィータ「はやては、お前達の偽物がレイを殺したと思っている」
シャマル「それをを見て、夢だったらいいなと思っているところがあるってことね。」
ヴィータ「シャマル！」
レイ「突き飛ばして悪かったな。」
シャマル「レイちゃん…？よね。」
ザフィーラ「時間がないその話は後だ」
そう言って抱えていたシャマルを降ろす。
シャマル「ありがとうザフィーラ」
レイ「オレがしくじったのがいけなかった訳か」
シグナム「後悔は後だ。」
なのは「それではやてちゃんはどうなっちゃうの？」
ザフィーラ「我らには分からぬが：レイは何か知ってるのではないか？」
レイ「取り敢えず管制者を説得して管理者権限を取り戻さなきゃ話

にならん」
ヴィータ「どーすんだよ！」

？「なのは！」
？？？「フェイト！」
なのはとフェイトを呼ぶ声が、この声は
なのは「ユーノ君」
フェイト「アルフ」

ユーノとアルフ、アイザーが来た。
ユーノ「助けに来たと言いたいんだけど」
アルフ「何が起こっているんだい？」
アイザー「…無茶しやがって」
そこから三人に説明をする。
アルフ「…あんた達を信じていいんだね？」
シグナム「主はやてを助けたい、その気持ちに偽りは無い。」
シグナムがこれまでにないほど強く言い切った。
なのは「みんな、はやてちゃんを助けよう」
フェイト「もちろん」
レイ「当たり前だ」

ユーノ「来たよ！」
見ると管制者の女の人がこちらに接近中。
レイ「オレに作戦がある」

黒い翼で飛翔する管制者。
フェイト「はあー！」
フェイトが斬りかかるが、避ける。
しかしフェイトはすぐに方向転換して、相手の攻撃を避けるために

回避行動をした。
管制者が攻撃をしようとした時
管制「！！」
バインドがかかるが
管制「バインドブレイク」
すぐにバインドは破壊された。
バインドで稼いだ時間で距離をとったフェイトと隠れていたなのはの
フェイト「プラズマスマッシャー！」
なのは「ディバインバスター！」
砲撃魔法が挟む形で迫るが
管制「盾」
難なく防いだ。
1人で2人の砲撃を防ぐ姿に驚くなのはとフェイト。
だが、
アイザー「油断してるぜ！」
管制「！」
いつの間にかアイザーが背後におり
氷付けにする
さすがに防ぎきれないのか、管制者は凍りつく。
しかし
ガシャン
何事も無かったように氷を破壊した。
管制「刄以て、血に染めよ・・・・『ブラッディダガー』」
反撃といわんばかりに真紅のナイフが、なのは、フェイト、アイザーを襲う。
なんとかナイフを捌ききって距離をとる
レイ【やはり作戦通りには行かないか：さて、どうする】
守護騎士達は下手に手が出せずひとまず待機している。
女の人「星よ集え」
そう言うと女の人の所に桃色の魔力が集まっていく。その魔法は

スターライト・ブレイカーだった。
フェイト「みんな距離をとるよ！」
大急ぎで距離をとる。
しかもかなりの距離を。
なのは「みんな、こんなに距離をとらなくとも」
フェイト「近くだと防御しても貫かれる！」
なのは「え？」
レイ「高町、自分の砲撃の威力ぐらい理解しろ」
シグナム《ああ》
シャマル《そうですよ》
なのは「うっ」
なのははみんなに言われ少しショックを受けた。

バルディッシュ〔サー、左方向３００ヤードに一般人がいます〕
レイ「何？」
なのは「守らなきゃ」
距離をとりながら一般人を探した。

狙われているのは、なのはとフェイト、アイザーのため、アルフとユーノ、守護騎士達は別ルートで距離をとっている。
レイとミコトは、なのは達の側に居たのと、最も管制者に近い位置に居るので、出来るだけ距離をとろうと速度に定評のあるフェイトとレイが他三名の腕を引きながら今出せる最高速度で一緒に逃げている。
スターライト・ブレイカーは、チャージ時間が長いため距離をかなりとれた。
なのは【早く見つけて守らなきゃ！】
すると角から女の子２人組がいた。
なのは「危ないので動かないでください！」
？「もしかして、この声は」

なのはが言うと女の子2人組が振り返った。
その2人組は・・・・・
すずか「なのはちゃん、」
アリサ「フェイト、レイ？」
すずかとアリサだった。

〈すずかＳｉｄｅ〉

少し前に何かが通る感覚がしたら私とアリサちゃんだけになってしまっていた。
アリサ「すずか・・・やっぱり誰もいない」
すずか「どうしよう？」
私達は空を見上げるとピンクの光があった。
アリサ「逃げよ、すずか！」
で逃げてきたら、なのはちゃん、フェイトちゃん、レイちゃん、病院で紹介して貰ったミコト君が変な格好をしていた。…レイちゃんの肩の上には妖精がいる…頭、打ったかな？

〈すずかｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

フェイト「とりあえず二人ともこの中にいて」
フェイトが設置型のバリアを出して2人を守るようにした。
なのは「フェイトちゃん、ミコト君、一列に並んで防ごう！」
レイ「オレは？」
ミコト「姉さんは防御系の魔法からっきしでしょ！」
レイ「なら相殺する」
みんな「「「「ダメ（だ）（だよ）！」」」」

アイザー「…やることがあるんだろ！なら今は任せて魔力温存しとけ」
なのは「適材適所だよ、レイちゃん」
フェイト「レイ」
レイ「…分かったよ」
レイが折れた。
アイザー【ったく、蒐集された上に腹の穴塞いでどんだけ魔力使ってっか自覚しろよ…】
なのは「一番先頭は私、次にミコト君、フェイトちゃんの順番でレイちゃんはその後ろ」
フェイト「でもそれじゃあなのはが！」
先頭とゆうことは、それだけ衝撃が大きい。
なのは「大丈夫、防御系は得意だよ！」

なのはの決意は固かった。

闇の書の管制の女の人が集めた魔力は、なのはのスター・ライト・ブレイカーを超えていた。
女の人「スターライト・ブレイカー」
遂にスターライト・ブレイカーが発射された。
着弾した所から広がる爆風。
その爆風は、なのは達のもとにもとどいていた。
なのは達は、スターライト・ブレイカーを防ぐために縦一列になっていた（アリサとすずかも含めて）。
なのはの作戦はこうだ
一列に並ぶことにより効果範囲を狭くすること。
これをすることにより、後ろの人は負担が少ないが、逆に先頭の人には負担がかなりのかかる。
しかし、一般人である二人を確実に守るには有効な手だった。

この作戦の発案者として、大切な友達を守るため、なのはは先頭に立つ。
爆風がなのは達を襲う。
しかし、バリアを最大展開することにより、耐えることができた。
なのは「ッく！」
なのはが手にケガをしたようだった。
フェイト「なのは！」
フェイトがなのはにかけよるが
なのは「私は大丈夫だから早くアリサちゃんとすずかちゃんの避難を」
みんなに心配を掛けまいと言う。
レイ「無茶しやがって」
みんな「「「「レイ（ちゃん）には言われたくない（よ）（な）」」」」
レイ「…」

アリサ「ちょと、なのは、フェイトこれどうゆうこと？」
しかしなのはの返答を待たずとして、２人は転送された。
フェイト「見られちゃったね」
レイ「今は、あれを止めるのが最優先だ」
ミコト「そうだね」
なのは《なら……ユーノ君、２人を守ってくれないかな》
フェイト《アルフもお願い》
ユーノ《分かった》
アルフ《無茶をするんじゃないよ》
２人はアリサとすずかの元へ

レイ「まずはあの管制の人を説得しないとな」
レイ達は説得を試みる。
シグナム「大丈夫か」

レイ「ああ、みんな無事だ」
シャマル「なのはちゃん、手出して」
なのは「？はい」
シャマルに治療して貰い、夜天の書の管制者の元へ向かう。
レイ「夜天の書の管制者、止まってくれないか？」
ヴィータ「もう、止めにしようぜ」
なのは「ヴィータちゃん達を傷つけたのは私達じゃないんです。だから、こんなことはやめてください。」
フェイト「はやてだってこんなことは」
管制「我が主は、自分の愛する騎士達が傷つき、友が死ぬこの世界が悪い夢であってほしいと願った」
レイ【オレ、死んでねーけどな】
夜天の書の管制の女の人は語る。
管制「我はただ、それを叶えるのみ。……主には穏やかな眠りのうちで、永遠の眠りを」

管制「そして、愛する騎士達を傷つけ、友を奪ったもの達には・・・・永遠の闇を」
管制者の足元に陣が発動する。
それは魔法使用の目印だ。
なのは「あなたはそれでいいんですか！」
その時、突然地面より何かの生き物達が表れ、なのは達を捕縛した。

管制「私はただ主の願いを叶えるだけだ」
その言葉にシグナムとなのはが反応した。
シグナム「願いを叶えるだけだと？…そんなことをして主はやては喜ぶのか？」
なのは「心を閉ざし、ただ主の願いを叶えるだけの道具になって、あなたはそれでいいんですか！」

シグナムとなのははは強く呼び掛けるが
女の人「我は魔導書・・・ただの道具だ」
自分は道具だとゆう意見は変えない。
なのは「あなたは道具でいいの？心があるでしょ！」
フェイト「道具ならおかしい、なんでそんなに、悲しい瞳で泣いてるんですか！」
夜天の書の管制の女の人は涙を流していた。
管制「この涙は主の涙…我は道具だ」
なおも否定する。
しかしその言葉には、悲しみの色があった。
フェイト「バリアジャケット、パージ」
フェイトは、バリアジャケットをパージすることにより、自分達を捕縛した生き物を吹き飛ばした。
フェイト「悲しみなどない？・・・そんな言葉・・そんな悲しい顔と声で言われても誰も信じはしない」
なのは「あなたにも、心があるんだ、悲しいと感じれるんだよ」
レイ「お前の主はきっとそれに答えてくれる、優しい奴だよ」
フェイト「武装を解除して、こんな悲しい事は終わりにして下さい」
管制「・・・・・・」
みんな「・・・・・・」
ここにいる全ての人が沈黙した。
しかし突然、地響きが起こった。
そして至る所から、火柱が立ち上がる。
管制「はやいな」
まるでこうなる事が分かっていたように言う。

管制「もう崩壊が始まったか、私もいずれ・・・・意識をなくすだろう。そうなったら暴走が始まる」
悲しそうな顔で言葉を続ける。
管制「そうなる前に、私は・・・・主の願いを叶えたい」

そう言うと、レイ達の周りに再び真紅のナイフが展開された。
女の人「闇に沈め」
ナイフが一斉に襲い掛かる。
爆発。
しかし、レイ達は回避した。
ヴィータ「この・・わからず屋が！」

フェイト「話を…聞け！」
シグナム「止めろテスタロッサ！」
なのは「ダメ！フェイトちゃん！」
冷静さを欠いたまま突っ込むフェイトとそれを追うなのは。

管制「お前達も悲しみを背負いし者、私の下で眠るといい」
夜天の書を二人に向ける。
しかし二人は構わず突っ込む。
フェイト「はぁー！」
なのは「っ、」
二人は攻撃をするが防がれた。
その時、二人の体を光が包み込む。
そして・・・・二人は消えてしまった。
レイ「フェイト！」
ミコト「なのは！」
女の人「全ては・・・安らかな眠りのうちに」
シャマル「そんな…」

残された者達は呆然とするしかなかった。

２０話　―ぶつかり合う想い―（後書き）

読んで下さりありがとうございます。どうでしたか？
意見、感想、アドバイス等いただけると嬉しいです。

次回を楽しみにして下さると嬉しいです。

では。

21話　―夢の中で<1>―（前書き）

大変遅くなりました。
ごめんなさい！
今回は闇の書に取り込まれたフェイトとなのはの話です。

21話　―夢の中で<1>―

〈なのはｓｉｄｅ〉

なのは「はっはっ」
泣きそうな顔で走ってる。
？「あ、なーさん！」
あ…またこの夢だ。
なのは「…うあぁん」
？「ど、どーしたの！？」
女の子の顔を見ると私は泣いてしまった。
女の子は優しく笑って頭を撫でてくれる。
私は話した。お父さんが病院に入院していて目を覚まさないこと、お姉ちゃんもお兄ちゃんもお母さんも看病やお店が忙しくて、家でいつも独りでお留守番をしていること。
独りで寂しくて走って公園に来ると笑顔で手を振ってくれて、泣いてしまったこと。

いつも心配かけないよう『良い子』でいようと頑張って、我慢して、でも寂しくて…公園でこっそり泣いていた、そんなとき声をかけてくれて嬉しかったこと。
一度話し出すと止まらなくて一気に話してしまった。
？「そうなんだ。」
私は話してから後悔していた。頑張っている家族に甘えたい、我が儘を言いたいなんて自分勝手なことを聞いて嫌われたと思ったから。
？「なーさん、少しくらい我が儘言っても良いんじゃないかな？家族なんだよ？言いたいこと言わなきゃ！」
なのは「で、でも」

？「よし、いこう！」
なのは「え？ちょ」

私の手を握り走り出した
場面が変わる

私は混乱していた。嫌われると思っていたのにそれで良いと言われて。
気付いたら翠屋の前まで来ていて。
？「よし、行くよ！」
なのは「待って！」
？「なーさん、話さないと何も伝わらないんだよ。」
なのは「でも…」
私は怖かった。
？「レッツゴー！」
なのは「ちょ」

カランカラン
美由紀「いらっしゃいませ…ってえ？なのは？と誰？」
？「なーさんの話聞いてあげて！」
美由紀「え、えとごめんね、今仕事中だから」
？「お願いします！」
いつも何があっても笑顔だったのに真剣な顔…初めて見るその顔に私は驚いた。
なのは「い、いいの！何でもないの！」
？「なーさんが言わないなら私が言う！」
恭也「なんだ？うるさいぞ。」
？「なーさん泣いてたよ！」
美由紀「え？」
？「もっと家族で一緒に居たいって！」

なのは「…て」
恭也「…」
？「独りは寂しいって泣いて」
なのは「もうやめて！」
美由紀・恭也「「！？」」
？「…何で？何で言わないの？」
なのは「言わなくていいの、伝わらなくていいの！寂しくても、辛くても我慢する！『良い子』で居るの！私が全部我慢すればみんなが助かるから！だから」
桃子「なのは！」
なのは「お母さん…？」
騒ぎを聞きつけたお母さんに抱き締められていた。
桃子「ごめんなさい、ごめんなさいなのは。…私達は自分達のことしか見えていなかったのね」
なのは「気にしないでお母さん、私が我慢すれば良いだけ」
美由紀「もういいんだよなのは、我慢しなくて…そんな事誰も望んでないよ…」
お姉ちゃんが泣いていて、
恭也「そうだ。これからは家族の時間を作って、…家族みんなでご飯を食べよう、な？」
いつも怖い顔していたお兄ちゃんがちょっとぎこちないけど笑顔で、
桃子「そうね、なのは、夕飯は何が良い？久しぶりにみんな一緒に食べましょう。手伝ってね。」
なのは「…うん！」
私の目はまだ濡れていたけど、満面の笑みを浮かべた。
？「良かったね…なーさん」

また場面が変わる

それから数ヶ月経って…
あの子の引っ越し。お母さんと見送りに来た。
お兄ちゃん達は学校で来れなかった。

なのは「…ちゃん！」
？「そんな泣きそうな顔しないで、なーさん。電話もするし手紙も出すよ。こっちに来ることがあったら絶対翠屋に寄るよ。
…ね！絶対また来るから笑って！なーさん。」
なのは「…うん、次あうまで泣かないよ…笑って『おかえり』って言えるように」
桃子「おいしいケーキを用意して待ってるわ。」
？「わーい！ありがとうございます！じゃあなーさん、バイバイじゃないね！」
なのは「うん！」

？「『行ってきます！』」

なのは・桃子「「『いってらっしゃい！』」」

〈なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

ー時の庭園、フェイトと□□□□の部屋ー

なのは・フェイト「「……う、う～ん…？」」
ふたりの少女が、ベッドから起き上がった
フェイト「うん…あれ？なのは……？」
なのは「ふえ？　フェイト、ちゃん……？」

二人の少女……“高町なのは”と“フェイト・テスタロッサ”は、同時に目を覚ました。
フェイト「あ、あれ？　私達、なんで一緒に寝てたんだろう？」
なのは「うーん……あれ？　なんでだろう？」
いつの間にこのような状態になったのか現状を把握するために、周りを見渡す。…知らない部屋、知らない家具、そして……
なのは・フェイト「「え……？」」
？？「すぅ……すぅ……」
フェイトと瓜二つの、そっくりな子が、子犬フォームのアルフといっしょに隣で寝ていたのだった。

なのは「ふぇ、フェイトちゃん…こ…この子…？」
フェイト「ま、まさか……？」
その時
コンコンッ
「「？」」
“アリシア”、フェイト、アルフ、なのはちゃん、朝ですよ～」
なのは・フェイト「「“アリ、シア”……？！」」
その時、彼女達は確信した。この子は……P．T．事件の時、生体ポッドに入っていた……フェイトのオリジナルで、“プレシア・テスタロッサ”の実の娘……“アリシア・テスタロッサ”なのだと……それともう一つフェイトは気付いた事があった。今、自分となのはを含めた四人を起こしに来た人の事を……ヤマネコの、プレシアの使い魔にして、自分を教育してくれた人……“リニス”だと言うことに。

アリシア「う、う～ん…おはよう、フェイト、なのは」
なのは・フェイト「「……」」
二人は、なぜこの子がここにいるのか？　どうして、こんな事になっているのか？　まったく、理解できていなかった。

ガチャッ
リニス「みんな、ちゃーんと起きてますか？」
そこへ四人が寝ている部屋に、一人…使い魔のリニスが入ってきた。
そして、カーテンを開ける為に、窓のほうへ歩いてゆく
アルフ「は～い」
アリシア「う、う～ん……眠いよう…」
リニス「あらあら、結構夜までお話してたんですか？」
アリシア「だってぇ」
リニス「なのはちゃん達とお話してたら、いつの間にか夜更かししてしまった、と言う事なんでしょう。それでも、ちゃんと早起きしている“あの子”やフェイトとなのはちゃんを見習ってほしいですね。アリシアはお姉さんなんですから、年長者としての意地を見せなきゃ」
アリシア「うう…」
なのは【…あの子？】
うなだれるアリシア…だが、そんな事も気にせず、リニスの言った“あの子”と言う単語にも反応せず、フェイトは
フェイト「り、リニス……？」
リニス「はい、なんでしょうか？　フェイト」
フェイト「……アリシア？」
アリシア「ん？」
なのは「アルフ、さん…？」
アルフ「なんだい、なのは？」
なのは・フェイト「「……」」
困惑する二人、そんな様子を見たリニスは
リニス「はぁ…前言撤回。どうやら今日は、フェイトとなのはちゃんもねぼ助さんのようです」
アリシア「あはは」
リニス「さぁ、着替えてください。朝ご飯ですよ。プレシアも、あの子もすでに食堂で待ってますよ」

なのは・フェイト「「！！！？」」
アリシア・アルフ「「は～い」」
二人は、驚いた…かつて、フェイトの事を大嫌いと言った彼女の母がいる事に…

なのは《フェイトちゃん、あの子って？》
フェイト《……私もわからないよ【母さんが…】》
なのは《フェイトちゃん…【上の空って感じ…大丈夫かな…】》

ー時の庭園　食堂ー
そこでは、プレシアと一人の長い茶髪の少女が、談笑しながらモーニングティーを飲んでいた
？「…本当に、美味しいね！この紅茶！」
プレシア「ふふ、ありがとう」
今飲んでいる紅茶を褒めながら、楽しそうに話していた…そこへ
アリシア「おはようママ！」
アルフ「おはよう、プレシア」
アリシア、そしてアルフの二人が入って来て、プレシアに挨拶をし
プレシア「おはよう、アリシア、アルフ」
？「アリシア、おはよう！」
アリシア「おはよう！」

少女が挨拶をし、アリシアも挨拶をした
リニス「プレシア、困りましたよ……今日は嵐か、雪でも降るかもしれません」
プレシア「？」
リニス「ほら、フェイト、なのはちゃん」
リニスに呼ばれ、顔を出したのは、浮かない表情をした二人……な

のはとフェイトの二人だった
なのは・フェイト「「……」」
プレシア「どうしたの？　フェイト」
？「おはよう！なーさん。…どうしたの？ぼーとして」
なのは「！？！？」
なのはの驚きの表情を浮かべ、凍りつく。
プレシア「二人とも変な夢でも見たのかしら？」
プレシアがフェイトの事を心配し、少女はなのはを心配した…確かに、起きてそうそうこんな表情で出てこられては、他の人はこんな反応をするであろう…“昨日まで、いつも通りにしていたのなら”
そしてなのはが驚きで凍りついたのはプレシアが居たからでも、アリシアが生きているからでもなく、

…プレシアと一緒にいる少女が

夢の中でいつも自分と一緒に遊んで、悲しいとき自分を笑顔にしてくれた女の子だったから。

21話　―夢の中で<1>―（後書き）

どうでしたか？
意見や感想をいただけると嬉しいです。
これから更に不定期な投稿になると思いますが、読んでくださると嬉しいです。

読んでいただきありがとうございました。次回は眠るはやてとレイ達の方を書くつもりです。

22話　―夢の中で<2>―（前書き）

かーなーり間があいてしまいました。
深くお詫び申し上げます。

冬休みに入り時間ができたのでしばらくはちゃんと投稿できると思います。

では、お楽しみ下さい。

22話　―夢の中で<2>―

ミコト「なのは！」
アイザー「フェイト！」
なのはとフェイトが一瞬で消えてしまった。

シグナム「夜天の書の管制よ、テスタロッサと高町をどこにやった！」
シグナムの言葉には怒りが籠められている。

管制「あの2人なら、私の中で眠っている。
2人が望む世界の中で」

エイミー「レイちゃんと守護騎士の皆さん」
エイミーからの通信がきた。
エイミー「その話は本当だよ、なのはちゃんとフェイトちゃんのバイタルは健在、どうやって助けるかはこれから検討」

管制「お前達も眠ったらどうだ？
私の中で眠れば、望みの世界があるのだぞ？」

ヴィータ「いくら望どうりでも、それはただの夢だろーが！」
みんなは、なのはとフェイトが生きていることを確認したのでいくらか落ち着いた。

シャマル「それに私達は、悲しみの連鎖を止めなくちゃいけないわ」

管制「お前達に悲しみの連鎖を止める事はできない」

レイ「…止めてやるよ……必ず」

ザフィーラ「夜天の書の管制者よ…もう終わりにしろ」

しかし管制者は首を横に振る。

管制「私は主の願いを叶える！さあお前達も」

アイザー「？何するつもりだ？？」

ヴィータ「避けろ！！」

アイザー・ミコト・レイ「「「「！！！」」」」

ガキンッ

レイ「っく…、」

レイはシグナムの剣を何とか受け止め、ミコトはヴィータ、アイザーはザフィーラの攻撃を避ける。

アイザー「いきなり何しやがんだ！！？」

ヴィータ「身体が言うこと利かねーんだよ！」

レイ「管制者が何かしたな」

ミコト「どうするの？姉さん？」

レイ「取りあえずヴィータ達を抑えてろ。」

アイザー・ミコト「「了解」」
そう言うと三人はお互いに向き合う
ヴィータ「すまねぇ」
ガキンッ
ミコト「ま、仕方ないよ」

ザフィーラ「迷惑を掛ける」
アイザー「ま、しゃーないだろ。シャマルもか？」
シャマル「はい…すいません。」
アイザー「一対二だからな、本気で行くぜ！」

シグナム「大丈夫なのか？管制者を放っておいて」
ガキン
レイ「ま、焦るなよ。」
ガチ、ガチャン
シグナム「！！？多重バインド？」
レイ「ちょっとじっとしとけよ？
プログラム割り込み開始」
そう言って目を瞑り集中する。
？？［ｙｅｓ．マイロード］

……

??「…割り込みに成功、守護騎士システム指令系統に接続。烈火の将シグナムに対する管理者の干渉をカットしました」

レイ「……よし」

額に浮いた汗を袖で拭きながら言いバインドを解除する。

シグナムは身体が思うように動くのを確認して言う

シグナム「何をした？」

レイ「管制者が干渉して制御してたからそれをカットしたんだ」

シグナム「ほう、そうか…【そんなことが…たった数秒でできるものなのか…？】」

真っ直ぐシグナムの目を見て言う。

レイ「はやてを、あの寝坊助を起こしてきてくれ。あいつの夢へ送ってやる」

シグナム「そんなことができるならレイ、お前が行けば良かったのでは…」

レイは静かに首を横に振る

レイ「オレは行けない。あいつの夢には既にオレ…いや『私』が居るからな。」

シグナム「どういう意味だ？」

レイ「兎に角、オレが管制者を抑さえとくから…家族を迎えに行ってやれよ」

シグナム「…分かった」
レイ「よし、…転送」
??［夜天の書に干渉……烈火の将シグナムを転送します］
シグナムは銀の光に包まれた

〈はやてｓｉｄｅ〉

気付いたら図書館におった。
はやて「…何で図書館に居るんやっけ？」
私はよう思い出せんで首を捻る。
？「どーしたの？はやて」
はやて「え…」
すぐ横で声がした。そっちを見ると
はやて「あんたは…」
長い茶髪の女の子
？「？変なはやて」
夢に出てくる女の子が居った。

〈はやてside　out〉

〈フェイト&なのはside〉

ー時の庭園　廊下ー

なのは《…フェイトちゃん、コレ、どういう事なのかな?》

フェイト《わ、分からない…でも、これだけは分かる。ここは、私が小さい時に過ごしていた場所で……》

二人は念話を取り合って現状を把握した。

今二人がいる場所は、昔フェイトが住んでいた次元空間を漂う前の時の庭園である事。フェイトはアリシアの妹と言う事。プレシアは、その二人の母…それも昔の、優しかったころの。

リニスは、そのプレシアの使い魔。アルフは、フェイトの使い魔という…そして、なのはは短期留学中（無印の時、管理局とのジュエルシード探索時の期間の事）に友達になったフェイトの家に友達を連れて遊びに来た…と言う事に成っている。

なのは《どうして、こんな事になっているんだろう?》

フェイト《分からない……でも、これは……》

フェイトが欲しくて…いや、欲しかった日々。

本来なら有り得ない、正にフェイトの夢だった。

〈フェイト&なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

〈はやてｓｉｄｅ〉

？「♪～」

私の隣で鼻歌を唄いながら絵本を読んでいる女の子。

？「？さっきからどーしたの？はやて」

ニッコリ笑いながらこちらを向く。

いっつもそうやった。

夢の中のこの子はいつも笑顔で…太陽みたいやった。

初めての友達、引っ越して居なくなってそのまま忘れてしまった…

？「はやて…？」

…？おかしい…何で忘れてしまったんや？

いくら引っ越したからって、そない簡単に忘れるはず無いやんか！

その瞬間頭中に真っ暗な空間で悲しい微笑みを浮かべる女の子の映像が流れ、レイの顔と重なった

はやて「レイちゃん…？」

ズギッ

ボロボロの家族、血まみれのレイちゃんが頭をよぎる。

はやて「そやっ」

？「…思い出したんだね。」
いつもと変わらない笑顔で女の子が言う。
はやて「やっぱり…夢の中なんやね」
？「はじめから気付いてたでしょ？はやて」
はやて「だって昔の姿そのまんまで目の前に居るんやもん」
？「それもそうだね」
はやて「私は…戻らなあかん、」
？「そっか…、！ちょうど迎えがきたみたいだしちょうど良かったね。」
はやて「え？」
銀色の光が当たりを埋め尽くし、それが収まると、
シグナム「主はやて！」
はやて「シグナム！無事か？みんなも…レイちゃんは！？」
シグナム「落ち着いて下さい。私も皆も無事です。
レイも生きてますし、恐らく元気です。」
はやて「よかった～！」
？「シグナムさん、はやて」
シグナム「おまえは？」

ニコッ
？「着いてきて下さい」
そう言うとパッと走り出し、
シグナム「待て！」
はやて「あ、待ってぇな！」
二人が女の子に追い付くと
強い光に包まれた

22話　―夢の中で<2>―（後書き）

読んでいただきありがとうございます！
どうでしたか？
意見や感想などいただけると嬉しいです。
次は今年中に投稿できると思います。
では。

23話　ー夢のおわりー（前書き）

なんとか書き上がりました！

ではお楽しみ下さい！

23話　ー夢のおわりー

〈フェイトＳｉｄｅ〉

私とアリシアは外にいる。

此処には私が欲しかった日常と時間がある。

だけどここは夢。

アリシア「フェイト、雨が降りそうだよ、帰ろう」

空を見ればいかにも雨が降りそうだった。

私は大きな木の下にいる

フェイト「ごめんねアリシア…私はまだ残ってるよ」

アリシア「なら私も残ってる！２人で雨宿り♪」

アリシアが私の傍に来た。

フェイト「……アリシア…ここは夢、なんだよね」

アリシア「・・・・」

フェイト「母さんは私にあんなに優しくない」

アリシア「優しかったよ、優しかったから壊れちゃったんだ」

フェイト「・・・・・」

アリシア「ねぇフェイト、夢でもいいじゃん
ここにはフェイトが望んでた日常があるんだよ」

フェイト「私は……
……私は、戻らなきゃ」

アリシアは少し残念そうだったが、すぐに笑顔になり

アリシア「そっか。なら行っておいでフェイト」

アリシアは手を差し伸べた。
その手にはバルディッシュがあった。
私はバルディッシュを受け取った。
アリシアは私に抱きついてきて

アリシア「現実でもこんなふうに話したかったな……」

涙が流れていく

フェイト「ごめん……ごめんね、アリシア」

アリシア「いいよ私はお姉ちゃんだし、待ってるんでしょ強い、優しい子達が」

フェイト「……うん」

アリシア「みんなと仲良くね」

そうしてアリシアは消えてしまった。

〈フェイトｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉

〈なのはｓｉｄｅ〉

私達はフェイトちゃん達と分かれて外を散歩をしている。

？「～♪」

夢の中でいつも私に元気を分けてくれた…笑顔が素敵な女の子

太陽みたいで…いつも私を引っ張ってくれた大切な友達。

……何で忘れてたんだろう。

忘れることが…

……出来たんだろう??

（（なのはちゃんっていうんだ。私の名前は□□　□□□））

ズキッ

なのは「うっ、」

鋭い痛みが走り頭を抑える。

？「なーさん?…！大丈夫！?」

何で……

…どうして……

？「……あそこでちょっと休もう」

…どうして名前が思い出せないの？？……

近くの木の下にあるベンチに座る。

雨が降り出した。

なのは「ねぇ、」

？「何？なーさん？」

なのは「此処は夢の中、なんだよね」

？「…そうだよ。」

なのは「にゃはは…やっぱり、そうなんだ。」

？「……」

なのは「私、戻らなきゃ。

友達が待ってるから！」

ニコッ
？「そっか。待ってくれる人が、
ともに戦う仲間が…居るんだね。」
なのは「うん！」
？「なら…」
女の子は手を差し伸べた。
その手にはレイジングハートがあった。
私はレイジングハートを受け取った。
？「頑張らないとね。」
雨が止んだ。
〈なのはｓｉｄｅ　ｏｕｔ〉
フェイト「なのは！」
なのは「フェイトちゃん！」
フェイトがなのはを見つけ駆け寄ってきた。
？「お別れは済みましたか？」
フェイト「！…はい。」
辺りに強い銀色の光が溢れた。

なのは「……此処は？」
気付くと真っ白な空間に居た
フェイト「あっ、はやて！」
なのは「シグナムさん！」
はやて「フェイトちゃん！なのはちゃん！」
シグナム「！高町、幼い少女を見なかったか？」
なのは「え？」
？「皆さん、これから夢の外へお送りします。」
シグナム「！？…出来るのか？」
？「はい、あなたのプログラムを介して通路を開きます。」
シグナム「【何者だ？…レイの関係者なのだろうか？】…そうか。」
なのは「ねぇ、帰る前に教えてくれる？」
？「なにを？」
なのは「あなたの名前。」
はやて「私も知りたい。」

なのは「はやてちゃんも知り合いなの？この子と」

はやて「もってことはなのはちゃんもかいな。そや、私もこの子の友達や！でも名前は思い出せへん。」

なのは「私も」

それを聞き女の子は申し分なさそうな顔をする

？「すみません、教えることは出来ません。」

フェイト「何故？」

？「現実の、本当の私が望んでいないからです。」

なのは「そんな…」

はやて「なんでや…」

二人は今にも泣きそうな顔をする

？「だけど、これだけは教えておきます。現実（あっち）の私は怒るかもしれませんが…」

なのは「何？」

？「現実（あっち）の私は今、あなた達のすぐ側にいます。」

なのは「本当！？」

はやて「なんやて！」

？「そしてとても危険な状態にあります。」

なのは・はやて・フェイト・シグナム「「「「！！！」」」」

？「今回の件が落ち着いたら…あまり時間がありませんが、力になってあげて下さい。」

シグナム「どういう事だ！？」

？「すみません、これ以上は……その代わりこれを」

はやての首にに何かをかける

はやて「これは…鍵？」

それはチェーンにさげられたシンプルな銀色の鍵だった。

？「はい。きっと役に立ちます。……ではそろそろ」

なのは「私は、思い出したいの、夢に出てくるまで忘れてしまっていた、あなたの名前を。」

はやて「なのはちゃん…私もや！」

なのは「絶対、思い出すから！」

？「はい。でも、一旦このことは置いておいて、悲しみの連鎖を断ち切って下さい」

なのは・フェイト・はやて「「「はい！」」」

ニコッ

？「では、」

…―がんばって下さい―　…

硝子が割れるような音が響き渡り、

光が溢れた

〈はやてｓｉｄｅ〉

眠い、眠い。

管制「主、そのまま眠っていてください。

主の願いは私が叶えます」

私の目の前には銀色の髪をした女の人がいた。

はやて「あなたは誰や？」

管制「私は闇の書の管制プログラムです」

闇の書の管制プログラム？

はやて「私の・・・・願いってなんや」

女の人「健康な体でいたい、愛しい者達と共に暮らしたい。
眠っていてください主、夢の中で全ては叶います。」

…でもそれは

はやて「どんな願いが叶ってもそれは夢や。
…今までの事は不思議と分かっとる。
でもな、私は破壊なんて望んでへん、あなたもそうやろ？」

しかし悲しそうな顔で

管制「私の心は守護騎士達とリンクしています。
なので守護騎士達と同じようにあなたが愛しい。
しかし私は闇の書の暴走によって破壊活動は止まらず、あなたを侵食し殺してしまう・・・」

はやて「・・・・覚醒の時少し分かったんよ。
シグナム達も悲しい事をいっぱい経験してきた事を」

はやて「・・・・でもな忘れたらダメや」

管制「！！」

はやてはゆっくり闇の書の管制プログラムの女の人の顔に手を優しく添える。

はやて「主の言うことは聞かなアカンよ」

はやての下に白いベルカ式魔法陣が展開された。
はやてが手を差し伸べて優しく添える。
女の人から流れる涙。

はやて「私が名前をあげる
闇の書とか呪いの魔導書とか私が言わせへん！
私は管理者や、それができる。」

管制「ダメです、自動防衛プログラムが止まりません。
管理局の者が戦っていますが・・・」

はやて「・・・・止まって」

はやてはそう願った。

〈はやてside　out〉

―その頃外では―

レイと防衛プログラムが戦闘していたが、防衛プログラムの動きが急に鈍くなる。

レイ「なんだ？」

その時
はやて《外で戦ってる管理局の皆さん！

私は・・・・その子の保護者の八神はやてです》

念話が発信された。

レイ・ヴィータ《《はやて！！》》

はやて《レイちゃんにみんな！・・とにかく、なんとかその子を止めてくれへん？

夜天の書のコントロールから切り離したんやけど、その子が行動してると管理者権限を使えへんのや。

それにシグナム達も通路は開いたんやけど、その子が邪魔してまだ出られとらんのや。

そこに居るんは自動防衛プログラムだけやから》

レイ「…？」

ユーノ《レイ、今から僕が言うことができればはやてだけじゃなく、なのはやフェイトも助けられる》

レイ《どうするんだ？》

ユーノ《とにかく魔力ダメージでノックダウンさせて。手加減なしの全力全開で！》

レイ「なる程、分かりやすいな。」

アルト〔まったくです〕

ヴィータ《おい、あの防御をどうやって抜いて魔力ダメージを与えるんだ？》

自動防衛プログラムは防御に専念していた。

ミコト《姉さんどうする？》

レイ《まだ守護騎士システムはあっちの制御下だからな、オレがどうにかするよ。》

アイザー《無理はするなよ？》

レイ《ああ。》

〈はやてSide〉

はやて「夜天の主の名において、汝に新たな名を送る」

はやて「強く支える、幸運の追い風、祝福の風、リインフォース」

周りが輝きだした。

〈はやてside　out〉

レイ「アルト・・・・フルドライブ」

アルト〔OK．マイマスター。シュトゥルムフォルム〕

そしてアルトがくの字型の二刀になる。

アイザー《レイ！それをやったらはやてが真っ二つだぞ？！》

ミコト《そうだよ、姉さん！危険すぎるよ！》

レイ《安心しろ、収束はしないし、最後まで振り抜かないから。今のオレに出せる最大魔力をぶつけるだけだ。》

アイザー《それなら良いけどよ》

ザフィーラ《それほど危険なのか？》

アイザー《ああ、あの技はクリムゾン　シザーっつってレイが作った収束型突斬撃魔法何だが…
レイの持つ二つのリンカーコアの最大魔力に加え収束した魔力を上乗せする。》

ミコト《そうして集めた魔力の１／４の魔力で魔力刃を強化、そのほかの魔力を纏って突っ込むんだ。》

アイザー《そのとき、アルトをハサミが物を切る要領で刃と刃が擦れるようにして振り抜く。》

ミコト《で、斬られた相手は馬鹿デカい魔力ダメージでオーバーキルされた上に上半身と下半身がオサラバ》

ヴィータ《なんだそりゃ！？》

シャマル《…凶悪ね……》

アイザー《ま、あれやったらレイは当分動けないがな》

ヴィータ《だろうな…》

レイ「一撃…必倒！」

手を胸の前で交差させ肩に担ぎ、そこから振り抜く。

レイ「はぁ！」

突斬撃魔法を放った。

２３話　ー夢のおわりー（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

どうでしたか？

意見や感想をいただけると嬉しいです（＾ー＾）

次回も近いうちに投稿できると思います！

次は遂に闇の書の闇をフルボッコにします！

そして闇の書事件が解決したら、いよいよレイの秘密と過去が明らかになる話を書こうと思っています！

楽しみにして下さると嬉しいです。

では。

２４話　―闇の終焉―（前書き）

思いの外早く書き上がったので投稿します。

次回も出来るだけ早く投稿したいと思っています。

では、お楽しみ下さい。

２４話　ー闇の終焉ー

黒と白の球体が生まれた。

アイザー「何だ…あれ？」

ガクッ

ミコト「姉さん！」

レイが崩れ落ちる

そんなレイをミコトが虎形態になり受け止める。

レイの髪と目の色は元の色に戻り髪の長さも元に戻った。

ミコトの背に跨り少しぐったりしたレイが口を開く。

レイ「やっぱ身体に負荷が懸かりすぎるな…」

アイザー「当たり前だ！セカンドコアを長時間使うからだ！しばらくおとなしくしとけ！」

ミコト「そうだよ姉さん！お腹の穴を塞いだときからだから…長く使いすぎ！シアンさんにも最後の切り札って言われてたのに…」

レイ「…悪かった。だが、ああでもしないと戦えなかったし…」

ユーノ「レイ！」
アルフ「フェイトは！」
ユーノとアルフが来た。
なのは「あ、みんなー！」
なのはとフェイトも戻ってきた。
ユーノ「なのは！」
アルフ「フェイト、大丈夫かい？」
フェイト「私達は大丈夫だけど、レイ大丈夫？」
レイ「ああ、問題無い。」
アイザー【んな訳ねーだろ。】
なのは「ねえ、あれは・・・一体」
白と黒の球体を指差し言う。
エイミィ「みんな、聞こえてる？」
そのとき、エイミィから通信が来た。
なのは「エイミィさんあれは・・・一体なんですか？」
エイミィ「黒い方は、闇の書の防衛プログラムだと思う。
クロノ君が向かってるから黒い方にちょっかいださないでよ。」
レイ「了解だ。」
フェイト「じゃあ白の方はなんなの？」

エイミィ「夜天の書の主、だと思うよ」
なのは「はやてちゃんだ！」

ー白い球体の中ではー
はやて「・・・管理者権限発動」
リインフォース「防衛プログラムの進行に割り込みを掛けました
数分程度ですが暴走の遅延ができます。」
はやて「うん・・・それだけあったら十分や。」
はやての周りに四つの魔法陣が現れる。
はやて「守護騎士達ををここへ」
魔法陣の輝きが増す。
リインフォース「守護騎士達を召喚します。」
はやて「おいで・・・・私の騎士達」
四つの魔法陣から光が現れ、光は外に飛び出し白い球体を囲む。
その時、白い球体が強い光を放った。

光がおさまると、夜天の書の守護騎士達が小さくなった白い球体に背を向けて囲んでいた。

シグナム「我ら、夜天の主の下に集いし騎士達」

シャマル「主在るかぎり、我らの魂尽きる事なし」

ザフィーラ「この身に命在るかぎり、我らの主の下に」

ヴィータ「我らが主、夜天の王、八神はやての名の下に」

はやて「リインフォース・・・私の杖と甲冑を」

リインフォース「はい」

はやては目をつぶると甲冑を身にまとう。

目を開けると瞳の色が変わり、杖が現れる。

はやてが杖を手にすると、白い球体は壊れて、外から見ると白い球体からはやてが現れた。

はやて「夜天の光よ・・・我が手に集え

祝福の風、リインフォースセットアップ」

今、夜天の王が降臨した。

ヴィータ「はやて・・・・はやて！」

シャマル「はやてちゃんごめんなさい」

はやて「ええよ、みんなそれに細かい事は後回しや
ただいま・・・・みんな」

ヴィータ「…はやて！」
ヴィータははやてに泣き付いてしまった。
なのは達も近くに来た。

はやて「なのはちゃん、フェイトちゃん、レイちゃん、ごめんなぁ、
うちの子達が迷惑かけて」

なのは「いいよ別に」

フェイト「大丈夫」
レイ「…気にするな、…、オレは気にしてない」
はやて「レイちゃん少し苦しそうやけど大丈夫なん？」

レイ「ああ」

クロノ「すまない、水を差してしまうのだが」

レイ「クロノ、今まで何してたんだ？」

クロノ「仮面の連中をね…」

レイ「捕まえたのか？」
クロノ「…ああ」

レイ「そうか」

ミコト「で、用件は？」

クロノ「時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。
今から数分後に防衛プログラムが暴走するがその対策を皆に聞きたい。
現在プランは二つ。」

なのは「どんななの？」
クロノ「一つはこのデュランダルを使い、強力な凍結魔法で封印する。」
そう言いながらカード型のストレージデバイスを見せる。

クロノ「もう一つは宇宙にあるアースラから魔導砲アルカンシェルにより消滅させる方法だ。」

シャマル「最初のほうはたぶん無理かと。コアがある限り復活しちゃいます」

ヴィータ「アルカンシェルも絶対だめだ！そんなことしたら、はやての家までぶっ飛んじまう！」

なのは「アルカンシェルてなに？」

ユーノ「分かりやすく言うとここら辺の空間は全て消えるくらいすごい魔導砲だよ」

レイ「断固反対だ。」

なのは「私も」

フェイト「私も」

クロノ「しかし、暴走が本格化するとこの手段しか無くなる」
みんな頭を悩ませる。
エイミィ「みんな、暴走まで15分きったよ、結論は早めに」
アルフ「あーもう！一気にズバッとぶっ飛ばすわけにはいかないのかい？」
フェイト「アルフ、そんなアバウトな…」
クロノ「そんな簡単じゃないんだ」
レイ「強い魔導砲を撃つなら迷惑がかからない所か…」
なのは「しかも広い空間・・・」
フェイト「・・・広い空間」
はやて「・・・・誰にも迷惑がかからない」
レイ・なのは・フェイト・はやて「「「「あっ！」」」」
4人は同時に閃いたみたいで
なのは「エイミィさん、アルカンシェルって宇宙でも撃てますか？」
クロノも分かったようで
クロノ「まさか・・・・君達、宇宙でやる気か？」

フェイト「クロノ、それしか方法はないよ」

クロノ「エイミィ…宇宙での使用は可能か？」

エイミィ「時空管理局の技術力をなめちゃ困りますよ。撃てるよ！」

リンディ「みんな大丈夫？」

リンディからの通信が。
なのは「リンディさん」

リンディ「その計画に賛成よ」

クロノ「か、艦長まで」

リンディ「計算上でも可能だからよ。
ただ個人個人の力に頼る形だからギャンブルになります。
なので現場指揮はクロノに任せます。」

クロノ「了解しました。
本当にギャンブルになりそうだが・・・この作戦がベストだろう。」

はやて「防衛プログラムのバリアは魔力と物理の複合五層、まずはこのバリアを抜いて」

フェイト「私達の砲撃でコアを露出」

なのは「最後にユーノ君達が転送魔法で転送して」

リンディ「アルカンシェルで蒸発させる。
いい作戦よ。
私達はアルカンシェルの準備に入ります。」
とリンディは通信を終了した。

エイミィ「暴走まであと１０分」

レイ「すまないがオレはご覧の通り使い物にならない。」

フェイト「いいよ、今まで一人で防衛プログラムを抑えてくれてたんだから。」

ミコト「ボクも結局姉さんの魔力を使うことになっちゃうから、参加できない。」

レイ「だから代わりと言っちゃなんだが、アイザーにクロノとユニゾンしてもらう。」

なのは「できるの！？」

アイザー「ああ、アタシは元々レイのデバイスとして設計されたけど中断して別のミッド式の魔導師用に設計し直されたんだ。
それに関係してか、相性：適合率さえ問題無ければどちらともユニゾン出来る。」

フェイト「じゃあクロノとは相性が良いの？」

レイ「ああ、魔力光も似てるし。それにアイザーは凍結の変換資質があるから役に立つだろうな。」

クロノ「ではよろしく頼む。」

アイザー「ああ、任せときな！」

エイミィ「後、5分」

緊張した空気が流れる。

なのは「えっと、みんな自己紹介…は時間的に無理だから名前紹介をしない？」

クロノ「なのはは、こんな時に何を」

なのは「みんながみんなの事を知っていた方がいいと思って」

はやて「私もそれに賛成や少しは息抜きもせんとな。」

その後、みんなが同意し

なのは「私は高町なのは」

ユーノ「ユーノ・スクライアです」

フェイト「フェイト・テスタロッサです」

アルフ「アルフだよ」

アイザー「アイザーだ。」

ミコト「ミコトだよ」

レイ「レイ・ハラオウン」

はやて「本名(ほんと)は？」

レイ「さあな」

はやて「ケチやなあ、八神はやてや」

シグナム「シグナムだ」

シャマル「シャマルです」

ヴィータ「ヴィータだ」

ザフィーラ「ザフィーラだ」

と簡単な名前紹介をし終えた。

なのは「みんな頑張ろう！」

みんな「応！」

球体の周りから次々と上がる黒い柱。

そしてその周りに闇の書の闇が作り出した生き物達。

それは暴走が始まった事を意味していた。

そして黒い球体から闇の書の闇がキメラとして現れた。

クロノ「作戦スタート！」

アルフ「チェーンバインド」
ユーノ「トラグルバインド」
ザフィーラ「縛れ鋼のくびき」
3人が周りの生き物達を倒していく。
ヴィータ「ちゃんとついてこいよ、高町なのは！」
なのは「ヴィータちゃんもね！」
ヴィータ「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼン」
カートリッジをロードした。
ヴィータ「鋼鉄粉砕」
アイゼンが巨大なハンマーになった。
ヴィータ「ギガントシュラーク」
そして勢いよくバリアにぶつけて一層目を破壊。
なのは「高町なのはとレイジングハート・エクセリオン、いきます！」
レイハ〔ロードカートリッジ〕
2人が砲撃の発射体勢に
なのは「エクセリオン：バスター！」
大威力砲撃により二層目も破壊。

シャマル「次、シグナム、フェイトちゃん」

シグナム「剣の騎士、シグナムの魂、炎の魔剣レヴァンティン
刃の連結刃につづくもう一つの姿」

シグナムは鞘をレヴァンティンの下につけると鞘がレヴァンティンと合体して弓になった。
シグナムや矢を出して構えた。
矢に集まる魔力

シグナム「駆けよ隼！」

レヴァン〔シュトゥウムファルケン〕
その矢をバリアにぶつける。
爆発が起きて三層目も破壊。

フェイト「フェイト・テスタロッサとバルディッシュ・ザンバー、いきます！」

フェイトは剣を振るい衝撃波で生き物を斬っていく。

フェイト「撃ちぬけ雷神」

バル〔ジェットザンバー〕
巨大な魔力刃でバリアを切り裂く、残り一層

闇の書の闇は反撃とばかりに生き物を使用して砲撃をしようとするが

ザフィーラ「盾の守護獣、ザフィーラやらせわせん！鋼のくびき」

ザフィーラが止めに入る

シャマル「はやてちゃん」

はやて「彼方より来たれやどりぎの枝、銀月の槍となりて撃ち貫け、石化の槍ミストルティン」

上空から白い光が闇の書の闇に刺さり石化していく。

しかし石化しているのに再生していく。

より気持ち悪い方に

エイミィ「並の攻撃じゃ再生しちゃう」

クロノ「でも確実に効いている、計算変更はなしだ。いくぞアイザー」

アイザー「応！」

クロノ・アイザー「「ユニゾン・イン」」

クロノの髪が空色に、目が綺麗な蒼色に

バリアジャケットが白になる。

そしてクロノはデュランダルを構えると

クロノ「悠久なる凍土、凍てつく棺のうちにて永遠の眠りを与えよ、
」
クロノ・アイザー「「凍てつけ！」」
デュランダル〔エターナルコフィン〕
氷結魔法により闇の書の闇の再生を止める。
その威力は闇の書の闇の周りの海もかなりの距離凍った。
クロノ「…なんて威力だ」
アイザー「アタシもビックリだ。」
なのは「いくよ、フェイトちゃん、はやてちゃん」
フェイト・はやて「「うん」」
なのは「星よ集え」
いつものスターライトブレイカーより多く集まる魔力。
なのは「これが私達の全力全開！スターライトー」
フェイト「雷光一閃プラズマザンバー」
フェイトに電撃が、
はやて「・・・ごめんな。
・・・・・・お休みな。

響け終焉の笛、ラグナロク！」

３つの光が強く輝き

なのは・フェイト・はやて「「「ブレイカー！！」」」

３つの光の柱が闇の書の闇に降り注ぐ。

その瞬間、ものすごい大爆発

シャマル「本体コア露出・・・・捕まえた！」

シャマルが旅の鏡で闇の書の闇の本体コアを捕まえた。

ユーノ「長距離転送」

アルフ「目標軌道上」

ユーノ・アルフ・シャマル「「「転送！」」」

３人により闇の書の闇の本体コアは軌道上に転送されていく。

局員「順調に転送されていますが、すごいスピードで再生が行なわれています。」

リンディ「アルカンシェル、ファイヤリングシステムを」

エイミィ「バレル展開」

闇の書の本体コアが転送が終了した瞬間

リンディ「アルカンシェル発射！」
アルカンシェルが闇の書の本体に当り、周りの空間ともども消え失せた。
エイミィ「対象の反応なし」
リンディ「アースラは引き続き観測を」
エイミィ「とゆうわけでみんなお疲れ様でした」
みんなが喜んだ。
なのは「やったね」
となのは、フェイト、はやてはハイタッチ。
レイ「お疲れ様だ」
シグナム「そうだな」
はやて「あれ？・・・・なんか急に疲れが」
なのは「魔法を初めて使ったからかな？」
シグナム「主はやて、大丈夫ですか？」
はやて「大丈夫や、それとみんなに紹介したい子がいるんよ」
なのは「誰！誰なの？」
はやて「リインフォース出てきて」

リインフォース「はい我が主」
とリインフォースが出てきた。
なのは、フェイト、アルフ、ユーノは驚きを隠せない。
それもそのはず。さっきまで戦っていたのだから
はやて「祝福の風、リインフォースや、みんな仲良くしてな」
リインフォース「皆には大変な事をしてしまった、だから軽蔑するのは無理ないが」
なのは「軽蔑なんてしないよ」
突然の言葉にリインフォースが驚く。
なのは「だってリインフォースさんは好きで破壊とかしていた訳じゃないんでしょう」
リインフォース「確かにそうだが、私はお前達に酷い事を」
フェイト「自分から進んでやりたかった訳じゃなくて、どうしようもなかったんだからそれはリインフォースさんの責任じゃありません」
リインフォース「しかしそれでは」
なのは「なら私達は」
なのは・フェイト「「リインフォースさんのした事を許します」」

許す。

その言葉にリインフォースは涙した。

リインフォース「すまない、…ありがとう」

はやて「良かったなあ…リ…ンフォ…」

レイ「おい？はやて？はやて！」

ヴィータ「はやてぇ！！」

クロノ「！！急いでアースラへ！」

悲しみの連鎖はまだ終わっていない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8113r/

魔法少女リリカルなのは～天空の瞳～

2011年12月30日22時49分発行